



水辺から学ぼう

市民団体
活動事例集



編集・発行

財団法人 河川環境管理財団

本書は、宝くじの普及宣伝事業として助成を受けて作成されたものです。

もくじ

| | | |
|----------------|--|------|
| | はじめに | 1 |
| | 河川と市民団体 | 2 |
| 学校教育 支援 | ① 自然の宝庫・福島潟を守り伝える NPO法人 ねっとわーく福島潟 | 4 ★ |
| | ② 身近な自然保護から意識改革 名古屋市水辺研究会 | 10 ★ |
| | ③ 河川調査と流域環境マップ作り 神戸川流域環境学習推進協議会 | 14 ★ |
| | ④ 流域の自然全体に学び、楽しむ 梅田川・水辺の楽校協議会 | 18 |
| 体験活動 支援 | ⑤ 大淀川を実感する環境学習 NPO法人 大淀川流域ネットワーク | 20 ★ |
| | ⑥ 川に学び、考える自然・環境問題 エコロジー研究会ひろしま | 26 |
| 河川を軸に まちづくり | ⑦ 北上川中流域を生きた博物館と捉える NPO法人 北上川中流域エコミュージアム推進会議 | 28 ★ |
| | ⑧ 水環境を総合的に捉える視点 NPO法人 水環境北海道 | 32 |
| | ⑨ 水の循環を進め、清流を取り戻す 水みちマップ実行委員会 | 34 |
| 河川の 保全再生 | ⑩ 美しい長良川を保全・継承する NPO法人 長良川環境レンジャー協会 | 36 ★ |
| | ⑪ 自然と共生する社会を目標に 重信川の自然をはぐくむ会 | 40 |
| データ・ 情報編 | 市民団体 活動の実践分析 | 42 |
| | NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会(RAC) | 44 |
| | プロジェクトWET | 46 |
| | 子どもの水辺サポートセンター | 48 |
| | 宝くじー口メモ | 49 |

※ページの後の★は6ページ、★は4ページ
構成で事例を紹介しています。

地図の番号は、上の活動を行った
市民団体などの所在地を示しています。



はじめに

川に入って水の冷たさや流れを感じたり、生きものを見つけ、^{つか}捕まえたり、さらには流れにのって流されてみたりすると、子どもたちは感動の声をあげ、目を輝かせます。子どもはそんな経験を積み重ねることによって、心身ともに健全に、ストレスにも強い人間として成長することでしょう。理科的なことから地域の歴史など社会的なことまで、川をとおして楽しく学べる題材は山ほどあります。水辺にふれて学んだことをまとめたり、人の前で発表したりすることによって、国語的な力やコミュニケーションの力も身につけることができることでしょう。川はまさに学習の宝庫です。

でも、なかなか子どもたちに水辺にふれさせるような機会をつくってやれないですね。そんな悩みを抱えている方たちのお役に立ちたいと考え、前作に引き続き、第2弾としてこの小冊子をつくりました。

前作は、学校での総合的な学習の時間での直接的な事例を紹介しましたが、今回は、NPOなどの市民団体が実施している、子どもたちを対象とした「水辺から学ぶ」活動の事例をまとめました。この冊子では、学校において直接的に教育支援として実施しているものから、学外で地域活動として実施しているものまで、幅広く紹介しています。また、教育を支援する情報入手先なども記載しました。

本書は市民団体そのものの宣伝をすることが目的ではありません。活動内容や方法を参考にいただき、学校の先生方をはじめとする方々が水辺での学習プログラムを作成する上で役に立てていただければ幸いです。

河川と市民団体

日本全国でさまざまな市民団体が河川の保全・再生などの活動をしています。数名から約1000人の会員を抱える団体まで、活動内容も川遊びから水質調査、清掃活動など、多岐に渡る活動の事例を紹介します。

市民団体の活動の現状

河川に対する市民団体の取り組みには、子どもたちの親水意識の向上を図るための体験・学習活動を始め、地域の連帯を深めながらの町おこしや、保全・再生・美化活動など、さまざまな事業があります。

本書では、こうした活動状況を「学校教育支援」「体験活動支援」「河川を軸にまちづくり」「保全再生活動」の категорияに分け、活動事例として11団体を紹介致します。少人数で活動している団体、多数の会員を擁するNPO法人、小学校・団体・行政が一体となって活動する団体、大学が主体となって活動する団体など、いろいろな形態が見られます。

いずれの団体も「子どもたちのため、環境保全のため…」というのが活動のエネルギーとなっているようですが、スタッフやボランティア数、後継者、資金的な面など、大小多くの問題を抱えながら奮闘されているのが現状です。

紹介する活動内容

活動内容の項目は主に下記の通りです。

- 1、活動地域
- 2、子どもの水辺・水辺の楽校の登録の有無
- 3、活動開始日
- 4、NPO取得の有無
- 5、役員
- 6、会員数
- 7、ボランティア数
- 8、活動拠点の有無
- 9、主な行事
- 10、安全対策
- 11、情報発信ツール
- 12、主な資金調達法
- 13、他団体との交流
- 14、年間活動計画と留意点
- 15、活動の状況や課題
- 16、課題の解消と今後の展望



1の『活動地域』は、河川の中流域が最も多くなっています。下流や河口付近に比べて水がきれいで、子どもたちを川に入れることに抵抗が少ないことが理由のようです。実際の活動現場は水深が浅く、流れも緩やかな場所が選ばれています。干潟や泉、水路を主な活動地点としている団体もあります。

2の『子どもの水辺・水辺の楽校の登録の有無』は、子どもたちの水辺での活動を推進するための制度^{*1}「『子どもの水辺再発見プロジェクト』及び^{*2}「水辺の楽校プロジェクト」への登録のことで、本書で紹介している団体も大部分が登録地域で活動をしています。

4の『NPO取得の有無』では、未申請の理由として、スタッフが少人数のため、NPO化による事

務処理を考慮してという団体がほとんどでした。

6・7の『会員数』・『ボランティア数』では、会員が8名から約1000名までと、ばらつきがあります。ただし、参加者の動員数や活動日数とは必ずしも比例するものではないことは確かです。市民団体の特徴のひとつである他団体・機関との協働作業などで対処しています。ボランティアに関しては、会員だけでなく、子どもの保護者も協力してくれることが多いようです。

8の『活動拠点の有無』では、国土交通省、市などの公的機関の施設を利用している団体の他、スタッフの自宅を兼用している例もあります。

9の『主な行事』は、【体験】ボートでの川下り、カヌー体験、川流れ、スローロープ投げ、救助訓練、釣り、水鉄砲作りなどの工作、ネイチャーゲーム、清掃活動など。【学習】プロジェクトWETのア

クティビティー(46ページ参照)、水質調査、生物調査、源流調査、野鳥観察、植樹・植栽、ビオトープ作り、マップ作り、発表会やフォーラム開催、などが代表的なものです。

手作りイカダやヨシで舟を作ったり、キャンプや宿泊するイベントも行われています。

ネイチャーゲームやプロジェクトWETのアクティビティーなどは、子どもたちの人気も高く、積極的に取り入れて欲しいイベントのひとつです。

清掃活動は定期的に行う団体もあれば、イベントの日に1行事として行われるケースもあります。

水質調査、生物調査は子どもが参加する行事の定番ですが、年間を通しての活動と、精度の向上が望まれます。

発表会やフォーラムは団体の活動には欠かせないものです。子どもたちにとっては有意義な経験であり、会員には意識の向上をもたらし、参加者への啓蒙も期待できます。

10の『安全対策』は、活動の中で最も重要な項目です。「一度でも事故を起こせば、二度とその事業はできなくなる」という自覚の声を多くの団体から聞きました。



細心の注意と、用具・準備の徹底、併せて保険加入も重要な考慮事項です。本事例集で取り上げた、川遊びを行う団体のすべてが、RAC(44ページ参照)の有資格者をイベントに参加させていました。中には約100名の有資格者を養成した団体もありました。

11の『情報発信ツール』は、団体の将来のためにも積極的な展開が望まれます。特にこれからの時代はホームページは必須アイテムです。会員増、地域住民への活動の周知を図るためには欠かせません。その他では、マスコミの活用も多いに役に立ったという声も多く聞きました。

12の『主な資金調達法』は、会員費と助成金、委託事業になりますが、今後は委託事業に力を入れていきたいという団体が大半を占めます。委託事業を行うと活動にメリハリがつくという話もよ

く聞かれました。

13の『他団体との交流』は、積極的な団体と、そうではない団体が割とはっきりしています。活動の内容にもよるようです。

14の『年間活動計画と留意点』は、すべての団体が少ないスタッフ・ボランティア数を苦勞しながら調整していることが明らかでした。活動数を積極的に増やしていきたいという団体と、現在の内容をより深めていきたいという団体に分かれています。

15・16の『活動の状況や課題』・『課題の解消と今後の展望』では、資金の確保、後継者育成がほぼすべての団体の二大課題になっています。「ボランティア活動である市民団体の宿命。いい解決策があれば、ぜひ教えて欲しい」という声が大勢でした。中には「NPOをやめて、会社組織にしたほうがすべての面でうまくいく」という会員の意見

もあったようです。しばらくは試行錯誤が続くでしょうが、より良い運営ができるよう、民・官・学・産の知恵を結集したいところです。

「せっかく集めたゴミの処理に困った」という団体も少なからずありました。行政の柔軟な協力体制が望まれます。

「保護者が子どもを川に入れることに反対する」という話もありました。河川への認識がさまざまであることを改めて知らされました。特に下流の都市部では浄化を望む声が多くありました。

今後の展望としては、ほとんどの団体が「川の保全・再生を通して、環境全体を視野に入れた活動を展開したい」という主旨の発言をしています。各市民団体の活発な活動が今後も期待できます。

活用したい支援団体

最後に、積極的に活用して欲しい支援団体も紹介していますので、42～49ページを参照して頂きたいと思います。国土交通省を始め、子どもの水辺サポートセンター、プロジェクトWET、RACなどのホームページから、さまざまなホームページリンクができますので、参考にしてください。

自然の宝庫・福島潟を守り伝える

NPO法人 ねっとわーく福島潟

「21世紀に残したい日本の自然100選」や「全国水の郷」「日本の音風景」など数々の100選に名を連ねる福島潟は新潟市にあり、国の天然記念物であるオオヒシクイがロシアから飛来し、オニバスの北限自生地でもあり、その他にもさまざまな生物が見られる自然の宝庫。「ねっとわーく福島潟」は“かけがえのない福島潟の自然を後世に伝えよう”を合言葉に精力的に活動しています。

● 潟先案内

400年ほど前には横3400m、長さ4900mもあったといわれる福島潟。現在は干拓で小さくなりましたが、193ヘクタール、周囲は6kmで、東京ディズニーランド2個分くらいの広さがあります。

この福島潟周辺では、約350種の植物が確認されており、中でも絶滅危惧種で葉の直径が150cm前後になる日本最大の水生植物オニバスや、ヒシの群生は壮観です。他にもヒシモドキ、デンジソウ

などの絶滅危惧種が観察できます。また、国内に約500種といわれる鳥類の内、220種が確認されています。潟のシンボル・オオヒシクイを始め、オジロワシ、オオタカ、コハクチョウなどを見ることができます。そのほか、魚類33種、甲虫115種、40種の水生昆虫を含む底生動物は57種が確認されています。

ねっとわーく福島潟ではこの豊かな自然を観察・散策してもらうためにスタッフが同行・案内をしています。2005年は37団体、約1500人を潟先案内しました。

● その他の活動

その他の活動には、自然環境の調査研究、潟先案内人養成講座や、さまざまな講演会と交流集会の開催、オオヒシクイの食草マコモの植栽、福島潟に関連するビデオやカルタ制作、小学校への出前授業、学校のビオトープ作り協力などがあります。

飛翔するオオヒシクイ(左)
潟とオニバス(右)



団体の紹介

活動の目的：福島潟の環境保全、ネットワークの確立、情報発信

- 活動地域—福島潟と流入出する河川
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—有り
- 活動開始日—1997年5月 ● NPOの取得—02年10月
- 役員—理事長・市嶋彰(理事24名、監事3名) ● 会員数—416名 ● ボランティア数—イベントに合わせて招集 ● 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—潟先案内、観察会、自然文化祭参加、など
- 安全対策—保険加入とスタッフによる安全管理の徹底
- 情報発信ツール—ホームページ、活動報告集(年刊)、会報(年4)
- 主な資金調達法—年会費/助成金(一般企業、こしじ水と緑の会、河川整備基金)/委託(市)
- 他団体との交流—新潟県自然・環境保全連絡協議会、福島潟野鳥の会、加治川ネット21、国土交通省、県、市、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|-----|--|------------------|---------------------------|---|---------|----------|--------|----|----|----------------------|---|---|
| テーマ | 潟先案内(予約で随時)／学習園の整備(毎月2回)／かたごはんの会(毎月1回)／出前授業(予約で随時) | | | | | | | | | | | |
| 企画展 | 水生動物観察会 | マコモの植栽 (6~9月) | 身近な水環境の 全国一斉調査 潟舟案内 | | 夏期無料潟案内 | 福島潟自然文化祭 | 福島潟交流会 | | | オオヒシクイ 周辺調査(3月まで) | | |

● 年間活動計画の留意点 中心的な活動である潟先案内に支障が出ないよう、スタッフの育成・教育を重視している。定期的な事業も多く、中でも潟の管理・保護は重労働でもあるため、スタッフの絶対数を確保する努力も欠かせない。新規事業も増えていくので、年間を通した事業計画はスタッフ会議を重ねて対処している。

この団体の活動のポイントをさぐる

● 設立のきっかけから発足まで

福島潟をこよなく愛する有志が任意団体を立ち上げたのが1997年、当初から200人以上が会員として名を連ね、5年後の02年には400名を超えるNPO法人となった。オオヒシクイを始めとする野鳥や、オニバスなどの貴重な水生植物の環境保護という分かりやすい目標が、地域への訴求力になったと副理事長の松木保さんは話す。川の場合の流域別の関係機関との調整というような問題がないことも幸いだったようだ。



オオヒシクイの食草マコモの植栽(左)。福島潟を背景に交流会集(右)

● 将来への展望

潟先案内や出前授業などの地道な活動を中心に、今後はネットワークの整備、強化も重点的に図っていくとしている。ピラミッド状や横並びの関係ではなく、ねっとわーく福島潟という輪の周辺に、さまざまな団体がその特性を生かしながら共有部分で協力することで、活動の相乗効果が生まれていく形を理想とする。

市嶋彰新理事長のもと、新規事業にも積極的に取り組んでいる。



■ 活動の状況や課題

潟先案内を始めとする活動内容は多彩で、運営も比較的順調だ。資金的には委託事業や助成金、会費等で支障はないが、強いて挙げるなら運営するミュージアムショップの採算性。取扱品の取捨選択やPR不足の解消など、合宿や会議を通して活発な意見交換を行っているので改善もそう遠くないだろう。委託事業にも積極的で、理事長を始めとする役員の変替もあり、新たな意気込みで現状を乗り越えようとしている。

■ 課題の解消と今後の展望

さまざまな課題解消のために合宿やスタッフ会議を設け、ワークショップ形式で前向きな提言や改善策が話し合われている。トップダウン方式ではなく、スタッフ全員による現場からの報告、提案が机上の空論に終わらないことは想像に難くない。研修旅行も毎年行われ、スタッフ間の対人関係も配慮した組織づくりを心掛けている。ラムサール条約登録に関する活動や、潟ごはんの会などの新企画ほか今後のテーマである。

ある活動日の記録「福島潟自然文化祭」

● ビュー福島潟でのイベント

ねっとわーく福島潟も入居する水の駅「ビュー福島潟」など、新潟市が管理する福島潟を中心とした周辺施設全体を「水の公園福島潟」と言います。ここで第9回を迎える自然文化祭には、ねっとわーく福島潟も多彩な催しで参加しています。

ビュー福島潟では、1階通路で「ヨシ(アシ)和紙すき体験」、展望ホールなどでは福島潟での総合的な学習の時間で学んだことなどを発表する「シンポジウム」の他、「福島潟カルタ」、「ジャズ・バー」、「お茶会」などが催されました。

屋外にも自然文化祭でしか食べられないオニ

バス潟鍋を始め、農協、商工会、青年会議所などの出店があり、多くの家族連れで賑わいました。



福島潟に自生するヨシが原料の「ヨシ(アシ)和紙すき体験」(上)。シンポジウムで成果を発表する子どもたち(下)

■ この活動を行うにあたって

- 対象: 地域住民
- 参加費: 無料
- 日時: 9月23日 9:30~20:00
- 内容: 雁迎灯、潟舟こぎ体験、ザリガニ釣り、オニバス潟鍋、シンポジウム、ヨシ(アシ)和紙すき体験、ほか
- 場所: 水の公園福島潟
- 参加人数: 約1万人

- スタッフ数: 約300名
- 潟の状況: 富栄養化が見られ、あまりきれいではない。コイ、ゲンゴロウブナ、ナマズ、メダカ、ドジョウ、オオクチバス、アメリカザリガニ、水生昆虫、などが生息
- 団体が用意する主な道具・装備: テント、シート、テーブル、イス、潟舟、ライフジャケット、望遠鏡、工具セット、ゴミ袋、プロジェクター他の施設備品、など
- 参加者が用意する主なもの: 特になし
- 協力者: 観光協会や商工会などの後援6団体

● 福島潟周辺でのイベント

福島潟周辺では、「潟舟こぎ」がメインイベントで、体験希望者が大勢おしかけました。この潟舟は昔から潟での漁や農作業に使っていたもので、「潟舟復活委員会」を設けて途絶えていた潟舟作りを現代工法で蘇らせました。第二号舟は昔の工法で製作の予定です。おごそかな進水式の後、

多数の希望者に体験こぎをしてもらいました。

他では「野鳥クイズ」「太陽の観察」「木工キーホルダーづくり」「野外コンサート」などが行われました。夕方からは約6000本のロウソクを灯して2羽のオオヒシクイを描いた「雁迎灯」に来場者の目が奪われました。



福島潟に繰り出す、潟舟「福島潟丸」の進水式



ザリガニ釣りを楽しむ参加者たちと水面に浮かぶオニバス(右)
木工クラフトのコーナーでは真剣な表情で作品作り(右中)

ビュー福島潟から見た「雁迎灯」と福島潟、後方は五頭山脈



協力事業「学校ビオトープ作り」

ねっとわーく福島潟の事業のひとつに学校ビオトープ作りへの協力があります。ビオトープとは、動物や植物が恒常的に生活できるように保全または復元された小規模な生息空間のことで、公園の造成や河川整備計画などに取り入れられています。福島潟の自然と、そこで活動する人たちの思いに感動したひとりの先生が、子どもたちのために、ビオトープを作ろうと思い立ちました。小学校から福島潟まで2kmもあるため、グラウンドにミニ福島潟を作ることにしたのです。ねっとわーく福島潟や、保護者、地域の協力を得て試行錯誤しながらも5年の歳月をかけて完成しました。

自然と子どもをつなぐ学校ビオトープ「太田の森」作り 環境教育の原点はここにある

新潟市立沼垂小学校教諭 塩原昭夫



● 学校にミニ福島潟を

10年前、学校の近くの福島潟という湖沼と出会い、オオヒシクイやオニバス等の貴重な生物と出会い、それを守り育てようと熱い想いを抱いて活動している人たちと出会った。子どもたちと一緒に地域の自然とかかわればかかわるほど、私たちがその価値に気付いていなかったことがよく分かった。

私は子どもたちのためにミニ福島潟を学校の敷

地に作りたくなった。それが太田小学校ビオトープ「太田の森」への夢となった。学校でのビオトープ作りでは、自然と子どもたちをつなぐ人が求められた。地域に根ざした環境教育を行っている団体との連携は、学校ビオトープ作りには不可欠であるからだ。そこで、私たちはNPO「ねっとわーく福島潟」の協力を求め、5年間をかけて「太田の森」作りに取り組んだ。



池を作る6年生



ホタルの水路が完成

■ この活動を行うにあたって

■ 1年目：ビオトープを作ろうプロジェクト

- ビオトープの大きさ：テニスコートの約4面分
- 池作り：井戸を掘って地下水を利用する

■ 2年目：森作りプロジェクト

- 森の大きさ：約テニスコート3面分
- 森の目的：ビオトープの生態系をより豊かにすることと、地域のコミュニティの場にするため

■ 3年目：ホタルプロジェクト

- 目的：ホタルの復活
- 環境作り：ホタル名人に協力してもらった

■ 4年目：池、小川、森の整備プロジェクト

- 目的：ミニ福島潟を目指して

■ 5年目：テーブルやベンチなどの設置プロジェクト

- 目的：太田の森に地域住民も親しみ、憩い・語らいの場となるように
- 現在：ゲンジボタルが乱舞するまでに成功

● 夢の実現に向けて

私たちは次の4つの方法で学校ビオトープ「太田の森」作りに取り組み、夢を実現してきた。

(1) 環境教育を教育活動の中心に位置づけ、地域の自然を学びのフィールドとする

子どもと自然とをかわらせるためには、地域の自然環境を学びのフィールドとして、総合学習で調査活動を行ってきた。その時の先生は、地域のお年寄りや、環境教育の専門家たちである。子どもたちが学んだことを地域に向けて情報発信し、地域の人たちと交流を図ることも計画的に実践してきた。

(2) 自然と子どもたちのかかわりを深めるための体験学習で、主体的な学びを育てる

子どもたちに自然に対する新たな気付きや視点を与える出会いが大切である。そのため、フィールドワークで自然体験をすると共に、自然を守り育てようと努力している人たちと出会わせてきた。その出会いにより、この貴重な自然を受け継いで守ってきたいという強い想いと願いが子どもたちの心に伝わった。

(3) 地域の人たちとビオトープの夢を共有する

ビオトープを作る時は、親父たちの遊び心をつかむことである。5年後、10年後の未来像を語り、



完成したビオトープではテーマを決めて観察を継続

共感して主体的に参画できる少数精鋭の親父部隊を私たちは作った。また、PTAの活動では、親子での自然体験活動を取り入れ、野山でネイチャーゲーム・蜜観察会・木工体験を行うことも夢を共有するための有効な手段であった。

(4) 学社融合を目指し、学校を開くことを目的としたビオトープ作りにする

専門家とのネットワークを組み、基本的な構想を作成した。校長の指導の下、PTAにビオトープの意義と目的とを説明し協力体制を確立した。資金は自前で作ることを原則として、市町村の助成金や廃品回収等、PTAと協力しながら確保した。地域コミュニティーの場として学校ビオトープ作りを活用することで、学校は自ずと開かれた。私は、環境教育の原点が学校ビオトープにあると思う。

● 新潟県の学校ビオトープ



新潟県では小学校10校と、幼稚園、高校の各1校にビオトープが作られています。大きさは大きさまで、大きなものはテニスコート7面分くらいになります。完成までの期間は、早くて2~3か月、長いと5年(太田小学校)くらいかかる場合もあります。こうした学校ビオトープでは、おおよそ水生植物が20~30種、陸上の植物が70~100種、水生動物20種、昆虫20種くらいが観察でき、ゲンジボタルが自然繁殖しているビオトープもあります。写真2点は新潟市立葛塚小学校のビオトープです。

身近な自然保護から意識改革

名古屋市水辺研究会

名古屋市を流れる庄内川と小幡緑地を市民にもっと親んでもらいたいという思いから活動が始まった「名古屋市水辺研究会」。そのたったひとりの思いは、森林帯も含む水辺環境の保全と改善へと広がり、賛同者の輪も大きくなりました。絶滅危惧種のオオサンショウウオの保護活動を始め、小学校の総合的な学習の時間の指導など、活動範囲は多岐に渡っています。

● オオサンショウウオ保護活動

オオサンショウウオは3000万年前から姿形を変えていないため、生きた化石とよばれる世界最大の両生類です。清流の川に生息し、国の特別天然記念物や絶滅危惧種に指定されています。

2002年、愛知県で唯一オオサンショウウオが生息繁殖する蛇ヶ洞川



人工巣穴上部のマンホールから水を流し、水面下の横穴の堆積物などを取り除く清掃作業。上は体長70cmのオオサンショウウオ

で大規模な護岸工事が始まることになりました。名古屋市水辺研究会は他の市民団体などと協力し、行政や工事会社と協議を重ね、オオサンショウウオの保護に精力的に活動、人工巣穴を設けることで解決しましたが、オオサンショウウオは戻ってきませんでした。

試行錯誤の末、コンクリートの匂いや不法投棄などで汚れた土砂を何度も清掃したりしました。やがて人工巣穴で産卵するまでになり、現在では40匹以上が確認されています。



トライアルサタデーin小幡と題した白沢川周辺での森の観察会

団体の紹介

活動の目的：水辺と森林帯に流域住民が親しみ、学ぶ機会を提供する

- 活動地域—愛知県内の河川と自然緑地
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—有り
- 活動開始日—1995年4月 ● NPOの取得—無し
- 役員—代表・國村恵子(事務局長1名)
- 会員数—約100名 ● ボランティア数—約20名
- 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—総合的な学習の時間の指導、オオサンショウ

- ウオ保護事業、水辺の学習会、リバースクール、など
- 安全対策—スタッフ、引率教師による安全管理の徹底
- 情報発信ツール—ホームページ、水辺(活動報告集・年刊)、水辺の会報(月刊)
- 主な資金調達法—年会費/助成金(県、河川整備基金)
- 他団体との交流—愛知川の会、瀬戸サンショウウオを愛する会、天然アユ保全ネットワーク、国土交通省、県、市、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | |
|-----|--|---------------|------------------|------|-----------------|-------------|-------------------|-----------------|-------------------|--------------------|------------------|-------------------|------------------|
| | 小幡自然観察会／リバーズスクール／学習会／愛知川の会／オオサンショウウオ調査(すべて、ほぼ毎月) | | | | | | | | | | | | |
| テーマ | 絶滅危惧の樹木 マメナシ観察会 | 絶滅危惧種 動物調査 | 身近な水環境 全国一斉調査 | 河川調査 | ホタル生息 環境改善事業 | 巣穴清掃 ケツ川 | 河川水辺の外來 生物実態調査 | 水フォーラム in 愛知 | 掛川公民館講座 自然学習指導 | 天然アユ保全 漁協シンポジウム | 小幡トンボ池 除草清掃作業 | 小学校教員 研修指導 | 愛知川の会 活動展示発表会 |
| | | | | | | | | | | | | 都市河川・ダム シンポジウム | |

● 年間活動計画の留意点 毎月の行事が多く、加えて出前授業、全国大会や他団体との交流・協働事業、出版物の発刊などもあり、月単位のスケジュール調整さえ容易ではないほど。出前授業などでの子どもたちからの質問へのアフターフォローが万全となるような体制、日程を最優先したいとの思いも強く、スタッフの成長が待たれる。

● その他の活動

小学校の総合的な学習の時間で指導することも中心的な活動のひとつで、地元の川に愛着を持つ子どもが増えています。

子どもたちだけでなく、大人も対象にしたリバーズスクールや自然観察会の開催数は300回を超えています。

また、『川に遊び川に学ぶ』『里山に生きる』『香流川』『水辺』などの貴重な資料、写真などが充実した出版物の発行にも力を入れています。



海上の森センターで開催された環境エクササイズでの説明風景



吉田川での水生生物調査で採取した生物を熱心に見る参加者



庄内川水生生物調査で熱心に解説を聞く子どもたち

■ 活動の状況や課題

約100人の会員と、10数人のボランティアが過密スケジュールを支えているが、主要活動は基本的に代表と事務局長の2人に対応するケースが多く、オーバーワーク気味。“1会員1河川”担当制を目標にスタッフの育成にも余念はないが、会員それぞれの事情もあり、なかなか思うようにいかない。資金的な面でも、可能であれば委託事業や助成、活動に必要な設備・備品等の公的貸出しなどの情報収集も心掛けたいが、その時間もとれないのが現状だ。

■ 課題の解消と今後の展望

情報収集の質と量の改善が急務。一般的に、情報化時代といわれる割には情報自体に錯綜の傾向があり、河川活動を行う市民団体への一本化されたホームページなどの情報源を探しだすのは容易ではない。他方、NPO化すれば資金的な面を始め、さまざまな課題解消に有効と言われるが、法人化した場合の事務処理の時間的ロスを考えると、デメリットもある。やはりスタッフ養成が鍵になるが、有望な人材も育ちつつあり、若い会員もいるので今後に期待したい。

ある活動日の記録「総合学習・水を調べよう」

● 香流川の水生生物を調査

川での実際の生物採取の前に教室でもレクチャーを受けていたためか、子どもたちに抵抗感はなく、思い思いの狙いをつけた場所に散っていきました。思ったより簡単に採取できたようで、服がぬれるのも構わず、夢中になっていました。

名古屋市水辺研究会のスタッフが事前に仕掛

石の下や水草の周りがポイントであることなど、多くのことを実際に体験しました。

圧巻は環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されているスジシマドジョウの採取です。北は静岡までしか生息しない東海型といわれる固有種ですが、香流川での生存確認はしばらくなかったようです。そのスジシマドジョウを始め、捕まえた生物のスタッフの説明に、子どもたちは香流川や環境に対する認識を新たにしました。

採った生物はスタッフや先生と相談して、学校や家庭で飼えるものは持ち帰り、残りは川に戻すことになりました。川に生きる小さな生物たちへの一人ひとりの思いは複雑だったことでしょう。寂しそうな表情が印象的でした。



川に入る前に注意事項などの説明を受ける



スタッフにポイントを教えてもらう



網にかかった生物を協力して捕まえる

■ この活動を行うにあたって

- 対象：小学4年生
- 日時：9月11日 10:00～11:30
- 内容：水生生物調査（総合的な学習の時間）
- 活動地点：香流川中流域
- 川までの時間：小学校から15分
- 参加人数：75人
- スタッフ数：2人（引率教師3人）

- 河川の状況：川幅は狭く、水深も浅い。流れはゆるやかで、水は市内を流れる川にしてはきれい。ギンブナ、タモロコ、オイカワ、カマツカ、スジシマドジョウ、カワヨシノボリ、トウヨシノボリ、モツゴ、モクスガニ、ハグロトンボ、スジエビ、メダカ、ウシガエル、などが生息
- 団体が用意する主な道具：水槽、エアポンプ、網、タモ、水温計、メガホン、筆記用具、など
- 参加者が用意する主なもの：バケツなどの容器、着替え、タオル、帽子、運動靴

香流川水生生物調査を終えて

名古屋市立宮根小学校教諭 岩崎 晋



学校教育支援 ②

「香流川が生き物の気持ちよく住める川になってほしいな」

香流川の生き物調査後に書いた作文には、こんな内容の感想がたくさん書かれていました。後日、一人の児童が採取した「スジシマドジョウ東海型（絶滅危惧種）」が新聞記事になったことで、その気持ちは一層高まりました。

子どもたちは、今回の調査をきっかけに、身近な存在ではありつつも、あまり関心を持たなかった香流川に対して、高い関心を持つことができました。また、たくさんの生き物が採取できた事実と、香流川は汚いという事実を重ね、「川をきれいにしなければ」と環境問題にも目を向けられるようになりました。その後の活動は、試薬を使い香流川の水の汚れを調べる学習、川が汚れる原因を探る学習へと発展していきました。川の汚れは人為的なものが多いことを知り、現在は自分でもできることから始め

ようということで、個々に、自分たちの生活を振り返り、生活排水の見直し計画を立て、実践をしています。そして、実践したことを基に、いろいろな人へと川をきれいにする呼びかけをしていきたいと考えています。

今回、香流川の生き物調査にあたり、名古屋市水辺研究会の方々には大変お世話になりました。採取の仕方や採取した生き物の名前や生態などを子どもたちに分かりやすく、非常に丁寧にご指導いただきました。教師だけの指導では、「スジシマドジョウ」も普通の「ドジョウ」と見過ごしていたことでしょう。専門の方に協力していただくことで、子どもたちはたくさんの知識や経験を得ることができます。これからも教育現場にご協力いただき、子どもたちの成長を支えていただきたいと思います。



川に生きる生物の説明を熱心に聞く



水槽を一人ひとりに回してじっくり観察



苦勞して捕まえただけに、川に戻すのは少し複雑な気持ち
採取した生物(左・上下)。下の写真の左下がスジシマドジョウ

河川調査と流域環境マップ作り

神戸川流域環境学習推進協議会

2002年秋に29校の1108人から始まった河川調査は、2006年春で通算8回、約6500人の小・中学生が参加。その調査結果は、Web-GISプロジェクトとしてインターネット上で随時更新されていて、流域の生息生物の増減や、水質の化学的分析結果を誰でも見ることができます。初めて参加する子どもは先輩たちのデータが無駄にならないよう一生懸命です。

● 2007年にNPO化

ふるさとを誇りに思い、愛する子どもたちを育て、豊かな人間性、社会性を持たせたいという思いから、ふるさと教育・環境教育の必要性を感じた8名の有志が、出雲市で神戸川流域環境学習推進協議会を立ち上げました。

学校やPTA、教育委員会に広く呼びかけ、まずは先生方への指導者研修会から始めました。当初、教員はあまり積極的ではなかったようです

が、子どもたちの反応が大変よく、現在の大規模な活動へと繋がりました。

生物調査や水質調査だけだった子どもたちも、次第にゴミ拾いをするようになったり、他地域へも関心を持つようになり、成果発表会では各種の展示に工夫をこらし、意見交換なども活発に行っています。

2007年からは、NPO法人しまね体験活動支援センターが新設され、斐伊川流域を含めたより広域的な活動へと発展していくことになりました。



指導者研修会で実習する教師たち



壁や床に所狭しと資料が並べられた成果発表会

団体の紹介

活動の目的：環境教育で豊かな人間性・社会性を持たせる

- 活動地域—神戸川流域(支川を含む)
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—無し
- 活動開始日—2001年4月 ● NPOの取得—07年取得
- 役員—会長・中 稔(事務局長1名)
- 会員数—8名 ● ボランティア数—河川調査時に各学校で保護者などを招集
- 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—河川調査、清掃活動、源流見学ツアー、など
- 安全対策—学校側とスタッフによる安全管理の徹底
- 情報発信ツール—ホームページ、神戸川流域環境マップ、年間活動報告書
- 主な資金調達法—年会費/助成金(河川整備基金)
- 他団体との交流—国土交通省、島根県中山間地域研究センター、出雲河川事務所、県河川課、県教育委員会、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|-----|----------------|---|--------------------------|---|---|---|----------------|------------------|---------------------------|---|---|---|
| テーマ | 調査研究・清掃活動（学校別） | | | | | | | | | | | |
| | | | 春の調査 （約1か月） 指導者研修会 | | | | 秋の調査 （約1か月） | 成果発表会 源流見学ツアー | 流域環境マップ、 年間活動報告書 作成 | | | |

● 年間活動計画の留意点 流域の20～30の学校が参加するため、統一調査日を設定することが容易ではない。学校に自由度を持たせるため、春・秋とも約1か月の調査期間を設けて実施している。各学校に、独自の調査研究や、広く河川環境保全活動に発展するような働きかけも行っている。

● Web-GISと調査結果

しまねけんちゅうざんかん
島根県中山間地域研究センターのWeb-GISは、
ちようじゅう しつぽうじょうきょう
鳥獣の出没状況からおいしい特産物まで、さまざま
な分野・部門で、地域の住民がインターネット上の
地図に情報を書き込み、発信する仕組みです。

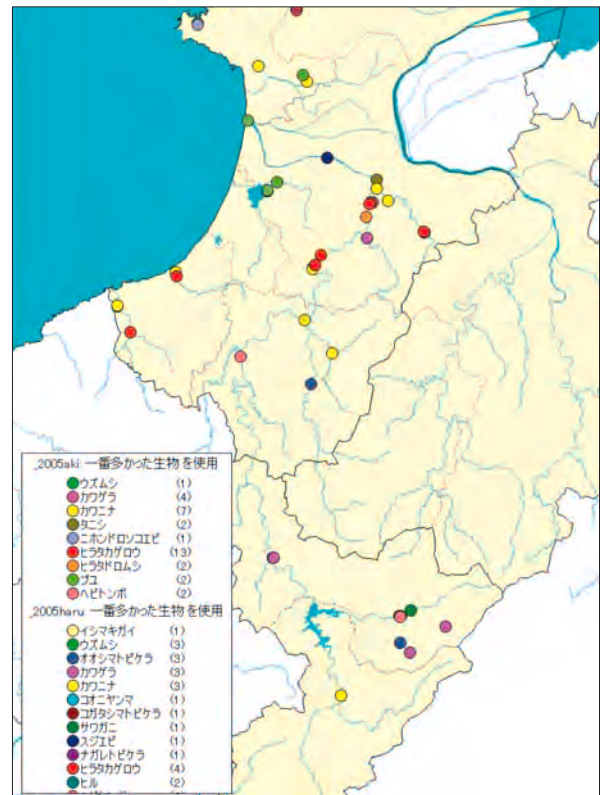
「スクールダス」部門の神戸川流域環境マップ
では、小・中学校の生徒たちが、自分たちで調べた
身近な川の生物調査の結果を、2002年から毎年
入力し、一般公開しています。

このシステムだと、データの蓄積によって過去

や、各地区との比較が可能で、対象がほぼ無限
に広がっていけるなどのさまざまな利点があり、子
どもたちも自然と熱が入るようです。



中山間地域研究センターのホームページから「スクールダス」部門を開いた画面(上)と、調査結果のページ(右)



■ 活動の状況や課題

協議会の課題は事務局の設置であったが、新たに発足したNPO法人しまね体験活動支援センターが事業を引き継ぎ、事務局も持つことになったため、安定した活動が可能となった。しかし、活動資金が助成金頼みである点や、担当する教員が毎年変わるため学校の取り組みがまちまちになるなどの課題は残っている。また、調査指導ができる専門家やボランティアスタッフの確保、調査精度の向上も常に心掛けねばならない課題である。

■ 課題の解消と今後の展望

今後は、ボランティア活動で運営されるNPO法人が中心となって、神戸川に隣接する斐伊川水系を含めた流域で事業を展開していくことになっている。事務局であるNPO法人の充実を図り、地域の企業・団体等からの資金面での支援を求めていくことが必要である。関係機関との協働によって事業の円滑化と質の向上を図り、広く保護者や地域住民の協力が得られるよう、効果的な広報活動や情報発信が必要となるが見通しは明るい。

ある活動日の記録「秋の統一調査日」

● 春と秋の調査

毎年、春と秋に調査しています。春の調査日は6月から7月の間の約1か月間で、その中の1日を統一調査日としています。秋の調査日は9月から10月の間で同じく統一調査日があります。

水生昆虫の種類や数を調べたり、*バックテストで川のきれい度を調査するのが主な活動ですが、ゴミ拾いも積極的に行っています。また、自作の竹竿やペットボトルでの魚釣り、段ボールで作ったイカダ乗り、水泳など、楽しい活動もあります。



先生も思わず夢中になる生物調査



スタッフと先生、子どもたちの息の合った調査風景

■ この活動を行うにあたって

- 対象：小～中学生
- 日時：9月30日 10:00～16:00(学校別)
- 内容：水生生物調査と水質調査(総合的な学習の時間)
- 活動地点：支川を含む神戸川流域(学校別)
- 川までの時間：学校別 ● 参加人数：360名
- スタッフ数：8名(引率教師は学校別)
- 河川の状況：上流の川幅は狭く、水深も浅いが、流れは

- やや速い。中、下流は川幅は広く、水深は浅めで流れもゆるやか。全域で水はきれい。ゴミ、シマドジョウ、ハヤ、カワムツ、オイカワ、フナ、コイ、アユ、ウナギ、カワニナ、ゲンジボタル、サワガニ、カジカガエル、などが生息
- 団体が用意する主な道具：調査用具、試薬などを事前に各学校へ配付
- 参加者が用意する主なもの：タモ、バットなどの用具、調査試薬、着替え、タオル、運動靴

● さまざまな展開

河川調査と流域の環境マップ作りから始まった活動ですが、今では数校合同で上流から下流までの見学ツアーを行ったり、宍道湖自然館ゴビウスや風の子学習館などから講師を招いたり、ホタル保存活動とつなげたり、漂流物まで調査したり、調査結果を手作りの冊子にまとめるなど、学校独自の活動も広がっています。

子どもたちの成長点としては、自分たちでテーマを決めて上流と下流の比較をしたり、川を汚す原因や、汚さないために自分たちにできることを考えるようになりました。調査時に捕まえた生物を大切に飼っている学校もあります。特にマップ作りと成果発表会では、一丸となって資料を作り、地域全体へとアピールしています。



水質調査について話しあう



生物の種類や数を調べる



清掃活動も積極的に行うようになった

流域の自然全体に学び、楽しむ

梅田川・水辺の楽校協議会

市民団体と行政、PTA、自治会、個人などで構成された「梅田川・水辺の楽校協議会」は、梅田川流域の自然環境保全を軸に、人々が憩える場、体験や学習の場として活用しながら、子どもたちの健やかな成長を支え育むことを目的に結成されました。都市部に近い地域ですが、残された豊かな自然にふれあい、子どもたちはいきいきと活動しています。

● 休耕田を再生し、米作りに挑戦

全国に約250ヶ所ある水辺の楽校。この国土交通省のプロジェクトにより、各地で水辺の環境整備も進み、さまざまな活用、活動が行われています。

横浜市の「梅田川・水辺の楽校協議会」では、流域の貴重な森や田んぼなどの自然全体の環境を守り、継承するために、水辺での遊びのイベントや、水質調査、ゴミ拾いなどの他、新治小学校の生徒たちと休耕田の再生活動「田んぼお助け隊」に力を入れています。育てた稲は「梅田川をまるかじり」イベントで餅つきをして食べています。



稲刈りをする新治小学校の生徒たち



梅田川の水を使った田んぼで田植え



子ども川の日での川遊び

団体の紹介

活動の目的：自然と共に、子どもたちの健やかな成長を支え育む

- 活動地域—梅田川
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—有り
- 活動開始日—1997年10月
- NPOの取得—無し
- 役員—会長・新治小学校校長（副会長2名、会計1名）
- 会員数—25名
- ボランティア数—約70名
- 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—子ども川の日、梅田川をまるかじり、休耕田の再生、源流調査、生物調査、水質調査、清掃活動、など
- 安全対策—保険加入とスタッフによる安全管理の徹底
- 情報発信ツール—流域マップ、市の広報誌、ミニコミ誌
- 主な資金調達法—助成金（区、河川整備基金）
- 他団体との交流—国土交通省、県、市、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|-----|------------|-----------------|----------------|--------|------------------|---|----------------|---------------|---------------|---|---|-----------------|
| | 定例協議会(年5回) | | | | | | | | | | | |
| テーマ | | 田んぼお助け隊 しろかき | 田んぼお助け隊 田植え | 子ども川の日 | 田んぼお助け隊 田の草取り | | 田んぼお助け隊 稲刈り | 田んぼお助け隊 脱穀 | 梅田川を まるかじり | | | 田んぼお助け隊 田おこし |

● 年間活動計画の留意点 さまざまな団体で組織されているので、各団体から選任された担当者による定例協議会を年に5回行い、安全性を最大限に考慮した活動計画を立てている。子ども主体の事業は夏休みなどの休日に集中するため、大人中心の活動と重ならないように調整、ボランティアなどの人員配備にも気を配っている。

● 夏と冬の楽しいイベント

子どもたちが毎年楽しみにしている行事は、7月の「子ども川の日」と、12月の「梅田川をまるかじり」です。

「子ども川の日」ではゴミ拾いをして、いかだ遊びや水鉄砲作り、川歩きや丸太橋渡り、生物調査などをします。「梅田川をまるかじり」では梅田川の水で育てた米で餅つきをしたり、流域の畑で採れた新鮮な野菜の鍋や焼イモを食べて、自然の恵みを体感しています。また、バームクーヘン作りや、しめなわ作りなどにも挑戦しています。



小さな川でも川遊びで楽しめる



子どもたちが育てた米で餅つき



昔からのやり方でしめなわ作りにも挑戦

■ 活動の状況や課題

「水辺の楽校プロジェクト」は国土交通省の施策で、平成11年からは地域の市民団体や河川管理者、教育関係者等が一体となって協議会を設置し、子どもたちの水辺での体験活動の推進を目的とした「子どもの水辺」再発見プロジェクト(文部科学省、環境省と連携)の推進に必要な水辺の整備等を行うものとして位置付けられ、全国規模で展開されている。多くの団体による協議会であるため、協働活動をいかに効率良く運営していくかがポイントとなる。

■ 課題の解消と今後の展望

活動継続に必要な基盤整備などは河川整備基金の助成で確保できたため、参加費などの徴収でほぼ運営可能な状況にある。課題は教育と行政現場で担当者の異動があるための引き継ぎと、市民団体のメンバーの高齢化である。それぞれの機関で調整・検討することになっているが、協働事業を円滑に進めていく上での懸念事項として協議会の場でも討議している。河川の環境向上を市民と共に考える活動を広げていくことが今後の展望である。

大淀川を実感する環境学習

NPO法人 大淀川流域ネットワーク

大淀川環境大学の開催を始め、大淀「川」のワークショップ、水質・流量調査、川の初級指導者養成講習会など、「大淀川流域ネットワーク」では多彩な企画で、「自然環境の保全」や「川づくり・地域づくり」及び「文化の向上の推進」のために国や県・市町村、他の市民団体などとも協力して精力的な活動を展開しています。

● 大淀川の環境を考える活動

「大淀川環境大学」は流域内の自然環境や河川文化について講義を行い、受講者には修了を認定します。これはボランティア養成コースと、指導者養成コースからなっており、その後、1年間の調査実習を行います。

「大淀『川』ワークショップ」では大淀川で活動している住民、団体と子どもたちに内容を発表してもらい、その活動の推進について討論や意見交換をします。

その他にも、「九州『川』のワークショップ」で九州の団体などとの討議、「地球温暖化防止活動

推進フェスティバル」、「みやざき市民活動フェスティバル」などに参加、発表などを行い、大淀川流域内外で多くの活動を行っています。

また、季刊広報誌の発刊や、ゴミの状況写真を地図に組み入れたゴミマップの作成、パネル展示などによる広報も、活動の大きな柱になっています。



環境大学の会場風景



A4版6ページの広報誌



ゴミマップ

団体の紹介

活動の目的：大淀川に関する情報発信、環境整備、啓発運動

- 活動地域—大淀川流域
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—有り
- 活動開始日—2003年4月 ● NPOの取得—04年4月
- 役員—代表理事・杉尾哲（理事6名、幹事・事務各1名）
- 会員数—180名 ● ボランティア数—イベントに合わせて招集 ● 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—おおよど川遊び、おおよど川の学校、環境大

- 学、川の初級指導者養成講習会、など
- 安全対策—保険加入とスタッフによる安全管理の徹底
- 情報発信ツール—ホームページ、広報誌（季刊）
- 主な資金調達法—年会費／助成金（一般企業、JA、市、河川整備基金）／委託（県、市）
- 他団体との交流—九州流域連携会議、川内川流域連携ネットワーク、国土交通省、県、市、RAC、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|-----|---------------------------|---|--------------|---|------------------------|------------------------------------|---------|----|-----------------|---|---|---------------------|
| | 大淀川環境大学調査実習／地域子ども教室（毎月2回） | | | | | | | | | | | |
| テーマ | | | 川の初級指導者養成講習会 | 川の水質・流量調査 大淀川環境大学 身近な水環境の 全国一斉調査 | 大淀川の水質・流量調査 ワークショップ | おおよど川遊び 子ども自然体験合宿 「おおよど川の学校」 | 水質・流量調査 | | 九州「川」のワークショップ参加 | | | 「みやさき市民活動フェスティバル」参加 |

● 年間活動計画の留意点 活動に熱心なスタッフやボランティアが多く、年々多彩な展開が図れるようになってきた。時期や、企画内容で人員がかたよらないように注意し、県や市、他団体との交流を始め、指導者、レスキュー有資格者の育成などを積極的に行うようにし、水質・流量調査や清掃活動なども定期的に実施している。

● 指導者やボランティアを養成する活動

子どもたちを川で楽しく安全に遊ばせるには、川での体験の基礎知識や技術及び水難救助活動などが必要なので、川の初級指導者養成講座を開催しています。川に学ぶ体験活動協議会（*1 RAC）のサブリーダー養成プログラムと、レスキュー3・ジャパンのファーストレスポnder（SFR）養成プログラムを組み合わせた講義と実習で、それぞれの資格が取得できます。また、*2 プロジェクトWETの講習会を実施し、受講者にはエドゥケーター（プロジェクトWETを用いて、子どもたちに教育を行う）の資格が与えられます。



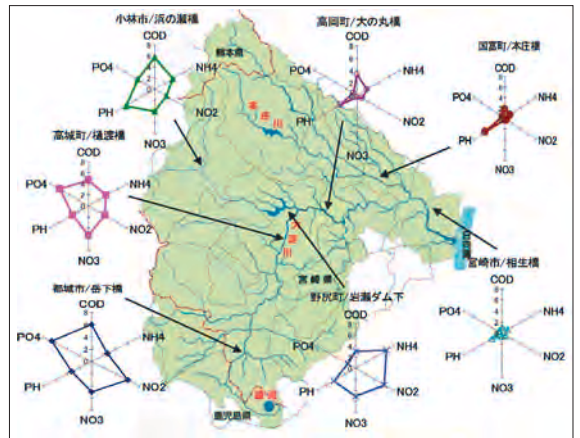
救命活動の訓練風景

大淀川の水質検査表(右)

● 水質保全などの環境保全活動

身近な水環境の全国一斉調査に参加し、会員やボランティアが流域内の20ヶ所以上でCODの水質調査などを行っています。また、独自に10数ヶ所でCOD、アンモニア態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素、オルトリン酸態リン、pHの6項目についてパックテストを使った定期的な測定も実施、測定結果は環境フェスタなどの各種イベント会場において、講習会やパネル展示で発表しています。

県主催の「川と人のフォーラム」では、県内の小学生と水質調査や水生生物調査などを行っています。



■ 活動の状況や課題

まったく課題がないわけではないが、比較的順調な活動状況。資金的には県の事業委託や助成事業、JAや地元企業の寄付金などで円滑に運営されている。スタッフやボランティアに関しては、代表理事のゼミの学生や子どもの保護者が積極的に支援参加、少なくとも現状では問題はない。環境大学の受講状況では、地元住民の大淀川に対する関心の高さが窺われ、強いて課題をあげるなら、そうした要望に柔軟に応えられるだけの組織の拡充である。

■ 課題の解消と今後の展望

スタッフの育成・継承、資金がNPO法人の課題だといわれているが、大淀川流域ネットワークでもスタッフの問題は最大の懸案事項だった。退職や転職して活動する人もいるが、そういう熱意のある人が今後も入ってくる保証はない。さまざまな職業の人により多く参加してもらうことで、各事業への分散と個人の負担減を図って対処してきた。試行錯誤しながらでも焦らずに、先を見据える努力を欠かさないようにしたい。

*1：RACの詳細は44ページ参照

*2：プロジェクトWETの詳細は46ページ参照

ある活動日の記録「おおよど川遊び」

● 知識や安全な遊び方を学ぶ

「おおよど川遊び」は文部科学省が推進する「子どもの居場所づくり新プラン」を導入した子どもたちのための企画です。自然体験は子どもの心を育てるのに重要な役割を持ち、地元の川での自然体験は郷土意識の育成にも欠かせません。川への知識や安全な遊び方などを学びながら、川への大切さ、面白さを実感してもらうために毎年趣向を凝らしたイベントを行っています。

今年にはヨシ舟遊びをメインにしました。スタッフは受付時間の9時前から汗だくでヨシと格闘していました。ヨシを刈り集めて1週間乾かし、組み立てるのに2時間くらいかかります。東ねたヨシをロープでくるだけですが、大変な重労働です。

9時30分から川流れやロープでの救助訓練が始まり、レスキュー資格を持つスタッフの指導で、貴重な体験をしました。意外にも「気持ち良かった」「面白かった」という感想がほとんどでした。

10時頃からはいよいよヨシ舟の進水式。不思議な乗り心地には大満足、何より、自然の材料でワクワクできる体験に感動したようです。

11時頃からは高飛び込みです。最初はおっかなびっくりでしたが、2回目以降は順番が待てないほどの楽しい遊びに。事前に安全点検した場所ですが、見ていてもスリル一杯の冒険です。

12時30分、大人気でボロボロになったヨシ舟の前に全員で記念撮影をしました。

「来年の企画を思うと、今から頭が痛い」というスタッフの、長い長い半日のイベント終了です。



川遊びはライフジャケットを正しく着ることから始まる



約2時間かかるヨシ舟作りは底にペットボトルをくくり付けて完成

■ この活動を行うにあたって

- 対象：小～中学生(低学年以下は保護者同伴)
- 参加費：100円(保険料)
- 日時：8月12日9時00分～12時30分
- 内容：ヨシ舟づくり、川流れ、スローロープ救助訓練、高飛び込み
- 場所：本庄川(大淀川皮川)中流
- 川までの時間：集合地点の公園から1分

- 参加人数：30名(小学生20名、中学生10名)
- スタッフ数：10名
- 河川の状況：川幅は約30m、水はきれい、ヤマメ、アユ、コイ、ドンコ、オイカワ、ギンブナ、水生昆虫、などが生息
- 団体が用意する主な道具・装備：テント、シート、テーブル、イス、ヨシ、竹、カマ、ナタ、縄、ペットボトル、ライフジャケット、スローロープ、ゴミ袋
- 参加者が用意する主なもの：水着、着替えの服、着替えの靴
- 協力者：保護者5名



体力があるのでほとんどの作業は大人が中心



乗り心地は何とも言えない不思議な感じ



小学生の女の子は竹竿こぎに挑戦



怖かったけど、気持ち良かったという川流れ



まずは低い飛び込み場から練習



ロープを使った豪快な飛び込み



スローロープでの救助訓練。何事も体験が大事



最後にヨシ舟を前に全員で記念写真

子どもたちのための活動事例



● ヨシ刈り小屋作り

河原に自生するヨシを刈った後で1週間ほど乾かしてから組み立てます。束ねたヨシを横木に跨がせるように柱に沿って壁にします。2時間ほどで完成した小屋の前で、地元の小学生が和太鼓の演奏を披露してくれました。



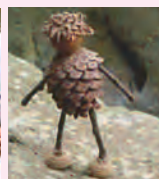
● ヤマメつかみどり

養殖池でのヤマメのつかみどりです。最初はうまくつかめなかった子どもたちですが、コツを覚えたのか、ヤマメが疲れたのか、どうにかつかまえられるようになりました。昼食はヤマメの串焼き、大いに盛り上がりました。



● 工作教室

川の周りの自然を利用した工作教室では、流木や木の実、小石などを材料に、創造力をフル動員しなければなりません。この世にふたつとない自分だけの記念作です。



● カヌー体験

流れの緩やかな場所でのカヌー遊びは、ゴムボートでの川下りとは一味違い、自分の意志で自由自在になる点が格別。親子2人乗りだと絆もますます深まることでしょう。地元のカヌークラブなどとの連携活動もできます。



● ネイチャーゲーム

ネイチャーゲームとは、アメリカで生まれた自然体験プログラムで、「自然への気づき」が目的。自然の不思議や仕組みが学べるゲーム数は100種類以上もあり、インターネットで調べれば、地域に合ったゲームを見つけられます。



● 水のオリンピック

*プロジェクトWETのアクティビティー(活動)のひとつで、いろいろな水の実験などを通して水の性質を学びます。特別な知識は不要なので、幼稚園児や小学生でも楽しく水のことを学びます。会場でのイベントには最適です。



この団体の活動のポイントをさぐる

● 設立のきっかけから発足まで

大淀川流域の16市町村が90年代から毎年、「大淀川サミット」という官民合同のイベントを開いていた。九州では流域面積が2番目、長さで4番目の大淀川だったが、年々ひどくなる一方の汚染対策を話し合う会議だった。

折しもNPO法の成立と同時期であり、自然とNPO法人発足の意見交換会がもたれた。「流域各地で活動している団体と行政機関等の情報連絡網の整備が何より急務で最大の要因だった」と代表理事の宮崎大学教授杉尾哲さんは当時を振り返る。河川土木を専門とし、サミットの第10回大会でのパネリスト講演に関わるきっかけだった。

課題は多く、都市部と農村部の関係、行政区と所管官庁の関係など、地域や分野を超えた活動の展開が望まれた。産・官・学・野が連携して一体となる取り組みが必要だった。



2003年8月、設立準備打ち合せ会、11月の設立準備会を経て、翌04年1月に設立総会、そして4月の発足となった。

情報連絡網の整備以外では、住民団体などの協働事業の推進、官民一体の自然環境の保全、川作り・地域作り、文化の向上の推進が主な目的となっている。

● 運営方針と実際

設立後は、まず大淀川流域に関わる情報発信に取り組んだ。流域で環境保全活動をしている住民や団体を紹介したり、各種のイベント情報などを提供する広報誌を発行、流域内のすべての自治体と町内会に無料配布した。

運営は広報、教育、イベント、調査の4作業部

会が各事業を企画・運営、年度末に評価部会で評価、改善を図るという体制になっており、会員は所属する作業部会を自由に選択できる。

主催、参加するイベントは多岐に渡るが、多数の地域住民、児童の保護者、ボランティアの賛同、協力体制がそれらを支えている。

● 運営上の苦労点と克服法

この理想的な支援体制はどのようにして築き上げたのだろうか。調査部会を切り盛りする大西正國理事は「とにかく率先してやってみせれば人はついてきます。理想を説くより行動が大事ではないでしょうか。限界だと思っても、喜ぶ子どもたちの笑顔を見たら、またやろうという気になるも



先事業を確実にやり遂げること。人事面では適材適所で任せること」だという。

のです」と語る。NPO法人の陥りやすい問題に関しては、「無理に事業拡大することより、使命を忘れず、優

● ネットワーク体制の将来

大淀川流域ネットワークでは、市町村や県、国土交通省などの行政機関、教育委員会や学校などを始め、地元の一般企業へも大小を問わず頻りに訪れるという。「協力、賛同を求めて、たまには怒鳴り合ったり、飲んで徹底的に話しあうことも交渉の秘訣なんです」と大西さんは笑った。

展望のひとつとして、大淀川流域だけでなく、広く各地の各分野の団体と交流を図ることが挙げられる。ネットワークが拡大するほど、地球環境全体の改善に繋がることだろう。そのためには、官、学、野だけでなく、産の積極的な協力、支援が求められるところである。

川に学び、考える自然・環境問題

エコロジー研究会ひろしま

太田川水系流域の子どもたちに川の自然や環境を伝え、その素晴らしさを理解したうえで、未来に継承していくことが「エコロジー研究会ひろしま」の事業理念です。「太田川せせらぎ夢学習塾」「リバーエコロジー大学」などの活動を通し、生物観察や水質調査、植樹などの体験学習を行い、自然と人間が共生していける環境作りを提案しています。

● 学び、楽しむ、さまざまな活動

「学ぼう」「触れよう」「楽しもう」をテーマに、水や生物に直接触れながら、カヌーやEボート体験などで自然を楽しみ、季節に合わせて春には鮎の稚魚の放流、夏にはホタルの生態、秋には川の水を汚さないためにできることなどを学ぼうというのが「太田川せせらぎ夢学習塾」の目的です。毎回、テーマを変え、朝10時から夕方まで、定員60名の催しに小中学生が参加しています。

「リバーエコロジー大学」は、野外活動体験リーダーの養成を行う講座です。川での活動にはさ

さまざまな知識やノウハウが必要なため、川に学ぶ体験活動協議会(*RAC)の養成プログラムに則り、初級リーダーを養成します。RAC指導者が講師になる「こども土曜塾」活動では、3回以上受講すると「こども博士」認定証を授与して子どもたちから喜ばれました。

その他では、「太田川己斐地区」を子どもの水辺(こいつ子ふれあいの水辺)に登録し、自然体験活動や環境学習に力を入れています。また、小学校での総合的な学習の時間の指導、「こいつ子ふれあいの水辺」での体験学習などのさまざまな活動を行っています。



太田川せせらぎ夢学習塾でのカヌー体験



リバーエコロジー大学での講座風景

団体の紹介

活動の目的：川での体験学習を通じて自然と人間との共生に貢献する

- 活動地域—太田川流域
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—有り
- 活動開始日—1991年4月 ● NPOの取得—無し
- 役員—会長・久保允誉(幹事22名)
- 会員数—50名 ● ボランティア数—イベントに合わせて招集 ● 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—太田川せせらぎ夢学習塾、リバーエコロジー大学、総合的な学習の時間指導、など
- 安全対策—保険加入とスタッフによる安全管理の徹底
- 情報発信ツール—ホームページ、エコロジーせせらぎ新聞(月刊)
- 主な資金調達法—助成金(一般企業、市、河川整備基金)／委託(県、市) ● 他団体との交流—子どもの水辺推進協議会、RAC、国土交通省、県、市、など

*：RACの詳細は44ページ参照

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|-----|------------------|---|-------------------------------------|---|---|---|-----------------------------|-----|----|---|----------------|---|
| テーマ | 太田川せせらぎ夢学習塾（年4回） | | | | | | | | | | | |
| | | | 身近な水環境の 全国一斉調査 水の都ひろしま 環境塾 | | | | リバー エコロジー大学 こいっこいフェスタ | 植樹祭 | | | ふれあいの水辺 学習塾 | |

● 年間活動計画の留意点 主事業の太田川せせらぎ夢学習塾が年に4回開催されるため、他の事業との調整に留意している。こいっ子ふれあいの水辺という施設もできたので、可能な限り、その利用、活用にも積極的に関わっていく予定。また、川での体験活動を中心に、エネルギー問題などの環境全般の教育にも対応している。



リバーエコロジー大学での救護訓練



こども土曜塾での実験風景

● 「こいっ子ふれあいの水辺」

己斐地区住民の憩いの場として親しまれている「こいっ子ふれあいの水辺」は、2004年に完成した貴重な環境施設です。

エコロジー研究会ひろしまは、国土交通省の緊急輸送道路の建設に伴う水辺広場の計画推進のため、地元住民とのパイプ役を務め、意見調整などを行いました。



こいっ子ふれあいの水辺の完成記念フェスティバルの1コマ(左)と、干潟観察会(右)



現在では水遊びのできる池や、干潟、多目的広場でさまざまなイベントが行われています。

■ 活動の状況や課題

スタッフ、資金、動員など、ほとんど問題はない。後継者育成も不安視するほどのこともない。スタッフ面では、会員50名のうち、常時20名ほどが活動可能とのことだが、課題として、常駐スタッフの仕事と活動の両立という問題がある。資金的には助成金で調整できている。動員に関しては、こいっ子ふれあいの水辺での活動実績などで認知度が高く、リピーターも多い。対行政との関係も良好で、委託事業なども増えており、ますますの状況だ。

■ 課題の解消と今後の展望

検討中の事案にNPO化がある。委託事業を展開していく中で徐々に必要に迫られてきた。また、活動内容では、RACの資格を有する指導者が幹事を含めて約100名いるので、大いに活用していける企画を検討中。この指導者数はリバーエコロジー大学を開催してきた効果だが、指導者が増えることで活動はより安全で高度、広範囲になる。さらに小中学校や保護者の理解も得やすくなるという好循環へと繋がっている。

北上川中流域を生きた博物館と捉える

NPO法人 北上川中流域エコミュージアム推進会議

北上川中流域の昔ながらの自然環境や歴史、文化など、またそれらを取りまく水と大地と大気までも一体のものとなし、生きた博物館「エコミュージアム」として捉えるという、ユニークでダイナミックな活動を展開しているのが「北上川中流域エコミュージアム推進会議」です。地域環境の保全、文化財遺産の保護、地域活性化を目的に結成されました。

● サイクリング大会などの活動

“誰もが水辺に親しめ、堤防からの雄大な景観を楽しめる環境づくり”を理念に、サイクリング・ウォーキングロードの整備事業を活動の基本としています。毎年、ロードを活用した健康、体力づくりの促進と地域作りを目的にサイクリング大会も開催しています。

また、子どもたちに北上川と郷土に親しみを

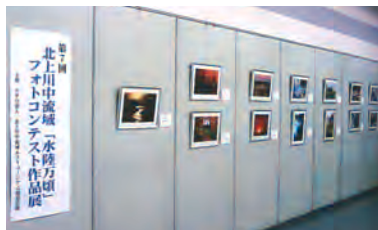
ってもらうための川下りなどの活動も大きな柱のひとつとして積極的に行っています。

2006年度からは「ノーマライゼーション」の理念に基づき、高齢者、身体障害者などの社会的な弱者も参加できる体制を整え、流域のすべての住民との触れ合いを大事にしています。

活動拠点の水沢水辺プラザ学習交流館には自転車13台、ゴムボート19艇、パソコン5台、双眼鏡20個が常備され、無料利用されています。



サイクリング大会でロードを走る参加者たち



フォトコンテストの会場風景



探鳥会の観察風景

団体の紹介

活動の目的：北上川中流域の広域地域作と明るい健やかな社会形成への寄与

- 活動地域—北上川中流域
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—有り
- 活動開始日—1998年10月 ● NPOの取得—00年3月
- 役員—理事長・安部皓三（理事24名、監事2名）
- 会員数—87名 ● ボランティア数—イベントに合わせて招集 ● 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—サイクリング大会、サマーアドベンチャース

- クール、フォトコンテスト、水生生物・水質調査、など
- 安全対策—保険加入とスタッフによる安全管理の徹底
- 情報発信ツール—ホームページ、アテルイ水辺プラザ日より（年4回）、会報（月刊）
- 主な資金調達法—年会費／助成金（一般企業、市、河川整備基金）／委託（県、市） ● 他団体との交流—北上川流域連携交流会、国土交通省、県、市、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|-----|--|------|---------------|-----------------|--------------------|---------|----------|-------|-----|---------|----------------|---|
| | サイクリング・ウォーキングロードの整備事業／北上川中流域地元学会(毎月第2月曜) | | | | | | | | | | | |
| テーマ | 巡回展 フォトコンテスト・ | 植物観察 | 水生生物・ 水質調査 | 北上川一斉 クリーン作戦 | ヤマアアドベンチ ヤースクール | 北上川を下る会 | サイクリング大会 | 自然観察会 | 探鳥会 | 子ども環境会議 | 地域づくり フォーラム | |

● 年間活動計画の留意点 サイクリング・ウォーキングロードの環境整備からスタートし、現在でもこの事業を基本に、子ども親水事業などのさまざまな活動を展開してきた。北上川と直接に関わる活動だけでなく、地域活性化事業や、他団体との交流、調整を図りながら、年間を通した活発な活動を目指している。

● 地域活性化のための活動

文化事業に広く深く関わっている点も特色のひとつです。

「北上川中流域活性化フォーラム」では毎回テーマを絞り、地元以外からもパネラーを招いて、活発な意見交換、討論を行っています。

水陸万頃と謳われる地元の美しい風景などの写真が多数応募される「水陸万頃フォトコンテスト」は地域を巡回展示、会場は賑わっています。

「探鳥会」は地域の野鳥を観察する恒例行事で、開催を楽しみに待っている住民が多いようです。

毎月行われる“エコツアー・景観、文化、歴史などの地域資源再発見”と題

された「北上川中流域地元学会」も人気のある活動で、地域に根ざした名所旧跡などを訪ねます。

その他では、植物観察や水質調査などの自然観察活動、秋と冬の水辺観察会と子ども会議、北上川中流域を丸ごと体験しようというエコツーリズム・アクション・プランの推進、地域情報誌「アテルイ水辺プラザだより」や会報の発行など、地域や子どもをキーワードとするさまざまな活動を展開しています。



エコツアーで訪ねた水車小屋



活発な意見交換が行われるフォーラム会場

■ 活動の状況や課題

地域全体の資源掘り起こしとその利用を目指す「地域丸ごとエコミュージアム構想」の観点から、東北最大の流域面積を誇る北上川ならではの自然、文化、生活を捉えなおす。このふるさとへの熱い思いが団体結成の動機だった。その精神は現在まで引き継がれている。2004年に運営組織の改変が行われ、理事なども入れ替わったが、年代的には大幅な変化とはならなかった。最大の課題は、結成時からスタッフの若返りが思うように進まないことである。

■ 課題の解消と今後の展望

世代交替は多くの団体の課題だろうから、試みや成功事例などの情報収集を心掛けている。立ち上げは企業家精神があれば何とかなるが、若手のスタッフを集めるのは非営利団体の宿命のようなもので思ったようにはいかない。理想的な年代構成は無理でも、設立時と同じスタッフ年代を順次確保することは可能なはずなので、徐々に体制を移行しながら、抜本的解決法を手探りしていくことで将来に期待している。

ある活動日の記録「サマーリバーアドベンチャースクール」

● 1泊2日でたくさんのイベント

2回目を迎えるアドベンチャースクールは、川下り、水質調査、星座観察、キャンプなど、内容が盛りだくさんです。

その中で最も人気のあるのがゴムボートでの川下り。でも、単なるボート遊びではありません。川の上から、郷土の母なる川、北上川を改めて見つめ直してみようというのが主旨です。川での注意を聞き、空気は自分たちで交代で入れ、4人ずつ

くらいのグループで、スタッフがカヌーで見守る中、子どもたちだけで川を下りました。

昼食の後は、カヌー体験や、おきばり漁の仕掛けを入れたりと思う存分楽しみました。

夕方からはいよいよキャンプの準備です。テントの設営もスタッフに手伝ってもらいながら自分たちでやりました。が、待ちに待ったバーベキューと星座観察の前に雷雨のためキャンプは中止、水辺プラザ交流館での宿泊となったのは残念でしたが、友達との語らいの夜は良い思い出になりました。



川で安全に遊び学ぶための講習を受ける



空気入れも自分たちでチャレンジし、点検してもらった



こぎ方とスローロープでの救助法の講習



冒険心が刺激されたカヌー体験

■ この活動を行うにあたって

- 対象：小学4年生以上(3年生以下は親同伴)
- 参加費：1000円
- 日時：8月10日 9:00~11日11:30
- 内容：ゴムボート下り、自然観察、おきばり漁体験、星座観察、キャンプ、水生生物観察、水質調査、など
- 川までの時間：集合場所の水辺プラザ交流館から1分
- 参加人数：16人(保護者8人) ● スタッフ数：14人

- 河川の状況：川幅は広く、水深は浅い。流れはゆるやかで水はきれい。アユ、オイカワトウヨシノボリ、カマツカ、ギンブナ、ニゴイ、ヒワヒガイ、水生昆虫、などが生息
- 団体が用意する主な道具・装備：ゴムボート、カヌー、オール、ライフジャケット、スローロープ、水質調査用パックテスト、透視度計、おきばり仕掛け、天体望遠鏡、テント、シート、調理用具一式、ゴミ袋
- 参加者が用意する主なもの：着替えるの服、靴、筆記用具、軍手、洗面道具、コップ、皿、雨ガッパ

● 2日目のイベント

2日目は5時起床、普段と違ってパツと目が覚めます。おきばり漁の仕掛けを引き上げると、数匹のフナなどがかかっていた。スタッフが朝のみそ汁に入れるために調理しました。

また、水辺の自然観察をしながらゴミ拾いをしました。大雨で流されたのか、ゴミはいつもより少なかったようです。

朝食の後、パケットテストや透視度計を使って水質調査をしました。時間も忘れて熱心に調査する

子どもたちの姿が印象的でした。夏休みの宿題にするためだけでなく、北上川への意識に変化があったのかも知れません。

引き続き、希望者にはカヌー初心者講習を行い、思う存分川遊びを楽しみました。

11時には水辺プラザ交流館でまとめの集会をしました。感想文を書くなど、貴重な1泊2日の体験を思い思いに振り返り、スタッフへの感謝の気持ちを述べて、解散しました。



テントも子どもたちが中心になって設営した(上)
透視度計は順番待ちしながら熱心に観察(左)
2005年の星座観察風景(左下)
2005年のバーベキュー風景(中)
2005年のイカダ作り。ビールケースを防水シートでくみ、その上に板をのせてでき上がり(中下)
その手作りイカダで川下り体験をした(右下)



水環境を総合的に捉える視点

NPO法人 水環境北海道

石狩川水系を中心に活動する「水環境北海道」は、水環境の保全、改善を志す人々とのコミュニケーションとネットワークの確立を願い、節度と良識のある社会の形成に寄与することを目的として設立されました。社会教育・町づくりの推進、文化・芸術・スポーツの振興、子どもの健全育成を図る活動などを中心に、多角的に事業を展開しています。

社会的事業

「北海道Eポート大会」は2006年に12回を数え、地域の行事として定着しています。ひとつの流域は同じ生活文化圏であると意識することを目的に、上下流の人々が川下り、シンポジウム、交流会、ボートトーナメントなどを通して交流します。

流域住民によるゴムボートでのゴミ拾い活動が「千歳川ウェルカムサーモン・クリーンリバー」です。帰ってくるサケと、石狩川の支川の千歳川の恵みに感謝の念を表すために行っています。

「石狩川流域交流フェスタ」は、石狩川流域の連携を促進する一方策として、流域各地から船で

集結地点に集合し、人、モノ、情報の交換と交流が行われます。夕張川、千歳川、豊平川などの支川から大勢が馳せ参じるイベントです。

その他では、水環境への意識高揚を目的とする場の「石狩川あおぞら大学」、リサイクルポット・土・苗木がセットで植栽が容易なバイオブロック工法による、流域全体の環境保全が目的の「石狩川流域300万本植樹」、モンゴルの森林回復のための国際協力事業の「モンゴル植林事業」、イカダに屋形を取り付けた「ヤカダ」運行などの多角的な事業計画の「石狩川流域における連携推進のためのシステムづくりに向けた社会実験」などがあります。



“まちの元気は水辺から”をテーマに行われた北海道Eポート大会



千歳川ウェルカムサーモン・クリーンリバーで集められたゴミ

団体の紹介

活動の目的：地域のコミュニケーションとネットワークの確立

- 活動地域—千歳川などの支川を含む石狩川流域
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—有り
- 活動開始日—1993年9月 ● NPOの取得—99年4月
- 役員—理事長・佐伯昇(理事9名、監事7名)
- 会員数—200名 ● ボランティア数—200名
- 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—リバースクール「千歳川・かわ塾」、漁川水辺

- の楽校プロジェクト、北海道Eポート大会、など
- 安全対策—保険加入とスタッフによる安全管理の徹底
- 情報発信ツール—ホームページ
- 主な資金調達法—年会費/助成金(河川整備基金)/委託(石狩川振興財団) ● 他団体との交流—全国水環境交流会、しりべつリバーネット、グリーンネットいしかり、帯広NPO28サロン、国土交通省、北海道開発局、道、市、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | |
|-----|--|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| テーマ | リバースクール「千歳川・かわ塾」(6.8.9.1月) / 石狩川流域300万本植樹(年6回) | | | | | | | | | | | | |
| | | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ | 北海道川の日 ワークショップ |

● 年間活動計画の留意点 リバースクールや石狩川流域300万本植樹などの年数回開催の事業があるため、「全国川の日ワークショップ」や他団体との協働事業などの日程調整には苦勞している。それでも回を重ねるごとにスタッフやボランティアの配属体制は整ってきたので、安全を第一に無理のないスケジュールが組んでいる。

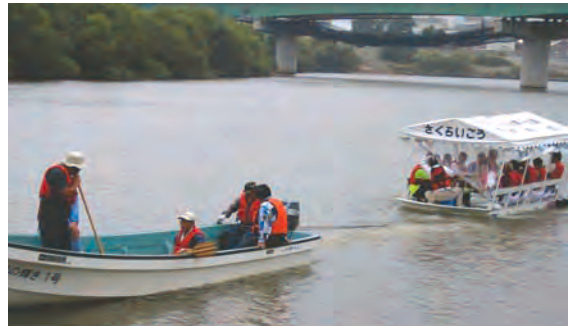
● 子どもたちのための事業

リバースクール「千歳川・かわ塾」など、子どものための活動にも力を入れています。年に4回行われる「千歳川・かわ塾」の夏プログラムは2泊3日、春と秋、冬は1日か1泊2日で、川下りや生物調査など、遊びと学びがぎっしりです。“体験学習型プログラムを通して、地域のアイデンティティを喚起し、環境面における問題意識を深め、流域全般の環境に精通した人材育成”が目的になっています。

「漁川水辺の楽校プロジェクト」は、地域の共有財産である漁川をステージにした、子どもの健全育成活動です。地域の環境保全意識の高揚、世

代間や地域交流によるコミュニティの育成など、良好な地域社会の創造を目指しています。

その他、清掃活動や石狩川流域300万本植樹などで、積極的な子ども参加を心掛けています。



千歳川観光舟運社会実験での屋形のイカダ“ヤカダ”の試験運行



千歳川・かわ塾での川横断の実習風景



バイオブロック工法での石狩川流域300万本植樹活動

■ 活動の状況や課題

全国水環境交流会(水環境に関わる「産・学・官・野」の幅広い人たちが交流し、ノウハウや情報の交流を行うことを通して、水環境の保全と創造に資することを目的として93年に発足)に呼応して立ち上げた団体のため、比較的スムーズな運営で現在に至っている。スタッフの年齢構成が50代が8割を占めるため、緊急ではないが、次世代の指導者育成が課題。資金的には、NPO化によって委託事業が増えたので、ほぼ支障はない状況である。

■ 課題の解消と今後の展望

活動が多岐に渡るため、参加者の年齢構成にあまり偏りがなく、事業を進めていく中で、後継者問題は時間がかかるとしても解決できるのではないかと。資金的な面では、スタッフやボランティアに交通費や食費などで負担をかけることだけは避けなければならない。委託事業や会費以外にも、助成金などの情報収集を怠ってはならない。“団体の目的・目標とする社会が、団体はなくても機能していく”、そうした地域づくりを理想とする。

水の循環を進め、清流を取り戻す

水みちマップ実行委員会

佐賀市は全国でも有数の水の都です。嘉瀬川支流の多布施川からの水路(クリーク)の総延長は約2000kmとされていますが、あまりにも複雑で、実際にどこをどう流れているのかは不明でした。汚れが目立ち、匂いも出るため、昔の清流を取り戻そうと、市民と行政が立ち上がりました。調査結果を地図に書き込んで発表するスタイルが注目を集めています。

● のべ2000人参加した水路調査

水みちマップ実行委員会が発足前の2001年、母体ともいえる森と海を結ぶ会に、国土交通省武雄河川事務所長から水の循環企画への協力依頼がきたのが活動の始まりでした。市民の多くが関心もなく、汚れていく一方の水環境に一石が投げられたのです。

翌年4月の第1回の会合には38人が集まり、綿密に集会を重ねた末の7月、230人が第1回水みちマップ作りに参加しました。調査距離は71km、新たに発見された水路の延長が5.2kmにも及び

ました。流れが認められたのは68%、流れなしが2%、澱みが30%という結果が出ました。

2006年までに20回の調査をしましたが、のべ参加者は2000人を超え、水路総延長は320km、調査範囲は環状道路に囲まれた市街地の中心部から周辺部へと広がっています。

調査では清掃活動も兼ねているため、市民の意識にも変化があり、“水の都”の面目を取り戻しつつあるようです。



調査前の講習会で水の採取の仕方などを実演する



水路の幅を計り、流れの速さも調べる

団体の紹介

活動の目的: 水みちマップ作成運動を通して、水辺環境の改善を図る

- 活動地域—嘉瀬川流域(佐賀市及び周辺地域)
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—無し
- 活動開始日—2002年4月
- NPOの取得—無し
- 役員—代表・半田 駿(事務局長1名)
- 会員数—67名
- ボランティア数—67名

- 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—水みちマップ実行委員会、水みちマップ作成
- 安全対策—成人参加者とスタッフによる安全管理の徹底
- 情報発信ツール—さが水みちマップ報告書(不定期)
- 主な資金調達法—年会費/助成金(県、河川整備基金)
- 他団体との交流—森と海を結ぶ会、水環境フェア実行委員会、佐賀水ネット、国土交通省、県、市、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|-----|--------------------|----------|---|---|---|----------|----|----|----|---|----------|---|
| テーマ | 水みちマップ実行委員会(約月1回)) | | | | | | | | | | | |
| | | 水みちマップ作り | | | | 水みちマップ作り | | | | | 水みちマップ作り | |

● 年間活動計画の留意点 水みちマップ作りは、毎月1回の割合で委員会を開催し、活動に向けての学習会なども熱心に行っている。市民、学校関係の自発的な参加を促していくという方針のもとに活動してきたため、年間のスケジュールにも幅を持たせ、参加団体の日程を優先するように務めている。

● 水路調査活動の実際

調査には「水みち調査票」と採取用具などを持ち歩きます。大人を含む5、6人のグループが実際に流れに沿って歩き、水の色、匂い、幅、深さ、速さ、川岸や川底の様子、動植物などを調べ、持ち帰った水の調査をして、結果を地図に書き込

むというもので、ボート遊びや泳いだりという面白さはない地味な内容ですが、参加者からはやりがいのある有意義な活動と評判になっています。



調査の後は体育館で水質調査



調査地域の地図を貼り合わせ、大きな水みちマップに



完成した水みちマップの発表会

■ 活動の状況や課題

月例の実行委員会では、水みちマップの準備等を含む学習会を設け、専門家による佐賀の水の歴史や、市の関係者による上下水道の状況などの講義など、市民団体への指導、講習を活発に行っている。小中学校を対象とする場合は総合的な学習の時間に合わせるために時間、内容に制約があり、学校の年間計画に左右される。市民対象の活動でも校区が中心になることが多いため、土日の活動にいかにか子どもの参加を増やすかが課題である。

■ 課題の解消と今後の展望

水辺環境の改善を図るためには、現在の活動状況も重要だが、何より次代を担う子どもたちへの啓蒙が欠かせない。マスコミの紹介もあり、小中学校の参加数、のべ参加人数は徐々に増えてはきているが、全市を挙げてという状況にはまだまだ。市民による自発的な活動を理想としているため、各校区のPTAや婦人会などの理解、協力を得ていく努力を今後とも続けていきたいが、幸い熱心な会員が多く、指導者の後継問題はそれほど深刻ではない。

美しい長良川を保全・継承する

NPO法人 長良川環境レンジャー協会

1300年の歴史を誇る鶴飼でも知られる長良川。この清流を次世代に引き継ぐことを目的に設立された「長良川環境レンジャー協会」は、河原マナー啓発と清掃活動を中心に、環境調査、河川利用調査、水生生物調査などさまざまな活動を行っています。特に力を入れているのが次代を担う子どもたちへの環境教育で、未来を見据えて取り組んでいます。

● マナー啓発と清掃活動

長良川環境レンジャーの二大活動は、河原でのマナー啓発と清掃活動です。河原への車の乗り入れの監視や、ゴミの持ち帰りをお願いするチラシなどの配付で、マナーを守ることを積極的にアピールしています。また、毎週土日・祝日には河原活動と称して、清掃を行っています。

目立つ帽子とユニフォームも手伝って、長良川

中流域では地元以外の行楽客にもマナーは浸透してきているようです。それでも残念ながら、これだけ徹底してもゴミはなかなかなくなりません。山や道路などから風で飛ばされてくるゴミも多いからです。マナーを守るのは川だけではないということ意識する必要があるようです。そして長良川環境レンジャーの目の届かない場所や時間に、マナー違反をする人たちも少なからずいるようです。

どうすればゴミで汚れない環境ができるのか、一人ひとりが考えなければならない問題がここにあるようです。



揃いのユニフォームで清掃活動をする会員



市民団体と共に清掃活動

団体の紹介

活動の目的：清流長良川を次の世代に引き継ぐ

- 活動地域—長良川中流域を中心に全流域
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録一有り
- 活動開始日—1998年5月 ● NPOの取得—00年9月
- 役員—理事長・柴田甫彦(理事13名、監事2名)
- 会員数—135名 ● ボランティア数—イベントに合わせて招集 ● 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—河原でのマナー啓発・清掃活動、環境調査研究活動、河川利用調査、水生生物調査、環境教育活動、など
- 安全対策—保険加入とスタッフによる安全管理の徹底
- 情報発信ツール—ホームページ、通信誌2誌(毎月)
- 主な資金調達法—年会費/助成金(河川整備基金)/委託(国、県、市)
- 他団体との交流—子どもの水辺協議会、ぎふ環境市民ネットワーク、風と土の会、国土交通省、県、市、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | |
|-----|--|------------------|---------------|-------------|------------|-------|--------------------------|---------------|----|---|------|------|-----------|
| テーマ | 河原啓発清掃活動(4~10月・毎週土日・祝日) / 小中学校の環境総合学習 / RAC川のリーダー養成講座(不定期) | | | | | | | | | | | | |
| | 河原啓発清掃活動開始式 | 少林寺浄法団体と千鳥橋下清掃活動 | 身近な水環境の全国一斉調査 | 長良川流域一斉環境調査 | 川ガキ。長良川へ集合 | いこまい会 | 岐阜伊奈波フオンスクラブと長良川クリーンウォーク | 高校MSリーダーズ清掃活動 | | | 支流調査 | 流域探訪 | 長良川クリーン作戦 |

● 年間活動計画の留意点 子どもたちの夏休みに活動が偏るので、委託事業や川のリーダー養成講座などの大人中心の活動を秋から冬に行うようにしている。スタッフやボランティアには限りがあるなか、小中学校の環境総合学習への参加要請が増えており、委託事業や不定期活動との予定の組み合わせに苦心している。

● 調査活動とその他の活動

調査活動の中では、2001年から06年6月に8回目となった長良川流域一斉環境調査が注目されています。これは長良川の全流域を対象とする調査で、市民を含む70余名が岐阜県から三重県までの10地点で、継続的に水素イオン濃度などのパックテストと、大腸菌群試験を行っています。

全流域の人たちとの交流をはかり、現状の再認識と河川愛護の普及に努めることが目的ですが、2県にまたがっての継続的一斉調査は全国的にも貴重な例で、一概に上流ほどきれいな水ではないという興味深い結果が出ています。

その他では、*RAC川の初級指導者養成講座の定期的な開催、小中学校の出前授業や環境総合学習などの環境教育活動を積極的に進めています。



真剣な表情で水質調査



RACの川の初級指導者養成講座で救命訓練



地元の小学生と水生生物調査

■ 活動の状況や課題

岐阜市の長良川環境レンジャー募集に端を発し、市民のボランティア団体として歩む中、流域全体をまとめなければ川はきれいにならないことを痛感して2000年のNPO化から6年、木曾川、揖斐川との「木曾三川フォーラム」との共同活動など、その活動の幅、実績は拡大してきた。だが、決して無理はしなかったし、これからも地道にできる範囲のことをするだけの方針である。現在までの順調な推移はその結果にほかならない。

■ 課題の解消と今後の展望

積極的な委託事業と会費、助成金で年間1800万円の予算で運営、資金的には問題はないが、5000万円以上の予算に5人以上の専属スタッフが理想である。後継者育成も、スタッフの年代に極端な偏りはなく、イベントに参加した小中学生に将来が期待できるので焦らずに見守っていくとのこと。現在は「河原啓発活動計画運営」「流域ネット推進」「環境調査研究活動」など8チーム制で運営、その結束力で今後の課題にも柔軟に対応していく。

* : RACの詳細は44ページ参照

ある活動日の記録「長良川へいこまい会」

● 1日目のイベント

“長良川へいこまい(行こう)”が合言葉の「子どもの水辺安全講座」の1日目は午前9時に受け付け、オリエンテーションの後、河原でアイスブレイキングという自己紹介のゲームからスタートしました。



穴の大きさを変えるなど、いろいろと工夫して遊んだ



あきらめかけたころ、3匹釣れて大歓声

参加者は小学3年生から中学3年生までの27名と保護者8名、講義や実習は11名の指導者が担当しました。

「竹を使ったクラフトと川遊び」では、竹を切る工程から取りかかりましたが、水鉄砲は満足のいくできで、合戦遊びなどで大はしゃぎでした。午後からは「水生生物による水質調べ」、竹竿での「魚釣り」「長良川の自然・生物の話・河原の遊び」講義など、ときおり雨も降るなか、盛りだくさんの川に学ぶ体験、実習をしました。



笹舟作りにも挑戦、川を流れる様子に感動した



地球温暖化、環境問題について考えた

■ この活動を行うにあたって

- 対象: 小学3年生以上、中学3年生まで
- 参加費: 1000円
- 日時: 8月17・18日 9:00~17:30
- 内容: 竹を使ったクラフト(水鉄砲)、水質調査、魚釣り、座学(長良川の自然・生物の話)、清掃活動、川の安全講座と実習、Eボートで川下り、など
- 川までの時間: 集合場所から1分

- 参加人数: 27人(保護者8人) ● スタッフ数: 11人
- 河川の状況: 川幅は広く、水深は浅い。流れは急な場所もあるが、比較的ゆるやかで水はきれい。アユ、カジカ、カワヨシノボリ、シマドジョウ、水生昆虫、などが生息
- 団体が用意する主な道具・装備: テント、シート、テーブル、ゴミ袋、釣具セット、竹、工具、Eボート、パドル、ライフジャケット、スローロープ、空気入れポンプ、救急箱、など
- 参加者が用意する主なもの: 水着、着替え、タオル、帽子、踵付きサンダル、水筒、弁当

● 2日目のイベント

午前には川に学ぶ体験活動として、長良川の河原周辺を歩き、清掃活動をしました。ほとんど全員のゴミ袋が一杯になったのには子どもたちもびっくりの様子でした。市役所の担当者にゴミの話を聞き、自分たちで分別もしました。

午後からは「川で安全に楽しむには」と題し、スローロープ投げの実習・Eボートでの川下り体験

という、2日間で最も楽しみにしていたイベントです。途中ではパドルで水を掛け合ったり、中洲にボートを置いて泳いだりしました。

すべてのイベントが終わると、2日間の講座を振り返るミーティングを行い、感想などを書いたアンケートを提出、長良川の自然とスタッフへの感謝の言葉を述べて解散となりました。



つつい競争意識がはたらいて、夢中でゴミ拾い



分別しながらも、ゴミの多さに改めて驚いた



パドルの握り方、こぎ方の指導を受ける



スローロープはなかなか思ったようにとばなかった



水の掛け合いで、びしょりになった



プールで泳ぐのとは勝手が違い、いい体験になった

自然と共生する社会を目標に

重信川の自然をはぐくむ会

重信川の自然環境の保全・再生・維持管理に務め、自然と共生する社会の実現に貢献することを目的に、「重信川の自然をはぐくむ会」は結成されました。愛媛大学の学生グループ「重信川エコリーダー」約30人を中心に、地域のNPO団体、国土交通省や県・市町村などの行政機関が一体となり、「重信川いきいきネットワーク計画」というスローガンを掲げて活動しています。

● 大学生を中心に、活動を広げる

スローガンの「重信川いきいきネットワーク計画」は、地域住民の意見や専門家のアドバイスを踏まえてまとめた計画で、“重信川を軸とした水と緑のネットワークの形成”、“自然と人、人と人がふれあう交流と学習の場の形成”をふたつの基本方針としています。

そのため、フォーラム開催を積極的に行い、清掃活動や埋め立てられた堤の活用、ミニビオトープ作り、植樹、泉の再生、野鳥のための干潟の保全など、さまざまな事業に取り組んでいます。

また、小中学校の教育支援にも力を入れてい

ます。総合的な学習の時間への出前授業などを始め、クラブ活動の支援にも関わり、現地観察会なども多数催しています。



留学生と小中学生も参加する留学生水源地友好の森記念植樹



小学校のクラブ支援活動



植樹祭の後に行われたプロジェクトWET

団体の紹介

活動の目的：民・学・官が垣根を超えて重信川の保全・再生を目指す

- 活動地域—重信川流域
- 子どもの水辺・水辺の楽校の登録—無し
- 活動開始日—2003年1月 ● NPOの取得—無し
- 役員—会長・矢田部龍一(副会長2名、幹事8名、監事2名)
- 会員数—約1000名 ● ボランティア数—イベントに合わせて招集 ● 活動拠点の有無—有り
- 主な行事—重信川クリーン大作戦(プロジェクトWETなど)、重信川フォーラム、松原泉の再生プロジェクト、重信川まるごと探検隊(泉めぐり、川遊びなど)、植樹祭 など
- 安全対策—保険加入とRAC資格のスタッフによる安全管理の徹底 ● 情報発信 ツール—ホームページ
- 主な資金調達法—年会費/助成金(四国河川文化ネットワーク 河川整備基金) ● 他団体との交流—四国河川文化ネットワーク 国土交通省、県、市、など

● 主な年間活動計画

| 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|-----|--------------------------------|---|---|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| テーマ | 出前授業(予約で随時) / 小学校クラブ支援(月に1~2回) | | | | | | | | | | | |
| | | | | 重信川クリーン 大作戦 | 重信川クリーン 大作戦 | 重信川クリーン 大作戦 | 重信川クリーン 大作戦 | 重信川クリーン 大作戦 | 重信川クリーン 大作戦 | 重信川クリーン 大作戦 | 重信川クリーン 大作戦 | 重信川クリーン 大作戦 |

● 年間活動計画の留意点 年4回の重信川まるごと探検隊を始め、広瀬霞の再生プロジェクトのためのワークショップや留学生友好の森記念植樹事業など、年間のイベント数は50を超える。その上、市民団体や行政機関との協働事業のため、その調整は並大抵ではないが、約30人のエコリーダーの学生たちのネットワークでこなしている。

● 子どもたちのための活動

子どもたちのための活動としては、川遊びや泉めぐりなどの楽しいイベントも年に2回ずつ開催しています。水質調査や生物調査、ゴミ拾いなども織り込み、子どもたちが水と緑という自然との共生を常に意識できるようにしています。小学校の卒業記念植樹を重信川の河口で行ったこともあります。校庭での記念植樹では味わえない、自然と一体となる感動を体験しました。

大学生という年代的にも身近な存在のエコリーダーたちは小中学生にかけがえのない存在にな

っています。新しいエコリーダーを目指す子どもが期待されています。



泉めぐりでの水遊び



泉めぐりでの生き物さがし



川あそびでも生物調査

■ 活動の状況や課題

重信川を研究する「重信川講座」に参加した学生たちが「重信川エコリーダー」を結成、NPO団体や行政などの協力・連携で「重信川をはぐくむ会」が結成された。現在では約1000人の構成員で、活動も多岐に渡るが、20を超える団体を調整、運営していくにはそれなりのシステム作りが不可欠だった。フォーラムの定期的な開催、自然環境の専門家で構成する「アドバイザー会議」や、地域部会の設立などであるが、学生という課題が常に残されてきた。

■ 課題の解消と今後の展望

エコリーダーのほとんどが卒業後は県外に去るため、その教育システムの確立、継承が緊急の課題である。大学主体の団体が持つ独特な課題だが、試行錯誤しながらスムーズな引き継ぎを可能にするプログラム構築を急いでいる。新しい取り組みとしては、流域の幾つかの小中学校をモデル校に、年間スケジュールを見据えて環境教育を通した全人格教育のシステム作りなどがある。大学というメリットを最大限に活用する試みとして今後の成果が目される。

市民団体 活動の実践分析

| 本誌ページ | 所在地・団体名 | タイトル | 主な活動河川 | 主な対象 |
|-------|---|-------------------|--------|-------|
| 4 | 新潟県 新潟市 NPO法人 ねっとわーく福島潟 | 自然の宝庫・福島潟を守り伝える | 福島潟 | 全世代 |
| 10 | 愛知県 名古屋市 名古屋市水辺研究会 | 身近な自然保護から意識改革 | 庄内川 | 全世代 |
| 14 | 島根県 出雲市 神戸川流域環境学習推進協議会 | 河川調査と流域環境マップ作り | 神戸川 | 小・中学生 |
| 18 | 神奈川県 横浜市 梅田川・水辺の楽校協議会 | 流域の自然全体に学び、楽しむ | 梅田川 | 小学生 |
| 20 | 宮崎県 宮崎市 NPO法人 大淀川流域ネットワーク | 大淀川を実感する環境学習 | 大淀川 | 全世代 |
| 26 | 広島県 広島市 エコロジー研究会ひろしま | 川に学び、考える自然・環境問題 | 太田川 | 全世代 |
| 28 | 岩手県 水沢市 NPO法人 北上川中流域 エコミュージアム推進会議 | 北上川中流域を生きた博物館と捉える | 北上川 | 全世代 |
| 32 | 北海道 恵庭市 NPO法人 水環境北海道 | 水環境を総合的に捉える視点 | 石狩川 | 全世代 |
| 34 | 佐賀県 佐賀市 水みちマップ実行委員会 | 水の循環を進め、清流を取り戻す | 嘉瀬川 | 全世代 |
| 36 | 岐阜県 岐阜市 NPO法人 長良川環境レンジャー協会 | 美しい長良川を保全・継承する | 長良川 | 全世代 |
| 40 | 愛媛県 松山市 重信川の自然をはぐくむ会 | 自然と共生する社会を目標に | 重信川 | 全世代 |

備考：「諸機関との連携」欄の「他の団体」は、法人組織と非法人組織両方を含みます。

「実践活動」欄の「指導者育成」は、RACなどの安全面での指導者育成のことで。

| 活動地の地域特性 | | | 諸機関との連携 | | | 実践活動 | | | | | | | | | | 成果発表・会報など |
|----------|----|----|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----------|------------|-------|---------------------------------------|
| 都市 | 郊外 | 山地 | 行政 | 学校関係 | 他の団体 | 水質調査 | 生物調査 | 野鳥観察 | 清掃活動 | 流域交流 | 環境教育 | 学習支援 | 講座・シンポジウム | レジヤーツ・スポーツ | 指導者育成 | |
| | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | ●活動報告集 ●生き物カルタ・ビデオ作成 ●ホームページ |
| ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | | ●水辺活動報告集 ●水辺の会報・書籍の刊行 ●ホームページ |
| | ● | ● | ● | ● | | ● | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | | | ●神戸川流域環境マップ ●年間活動報告書 ●ホームページ |
| | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | | ● | | ● | ● | ● | ● | | ●流域マップ ●ホームページ |
| | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ●大淀川流域ネットワークTIMES ●ホームページ |
| ● | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ●エコロジーせせらぎ新聞 ●ホームページ |
| | ● | ● | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ●アテルイ水辺プラザだより ●会報 ●ホームページ |
| ● | ● | ● | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ●ホームページ |
| ● | ● | ● | ● | | | ● | ● | | ● | | ● | ● | ● | | | ●さが水みちマップ報告書 |
| ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ●長良川（通信誌） ●木曾三川フォーラム通信 ●ホームページ |
| ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ●フォーラムテキスト刊行 ●CDR、ビデオ作成 ●ホームページ |

川に学び・遊ぶ体験を強力サポート

NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会 (RAC)

川での活動を通し、人間性の回復や水環境の保全についての認識を広げることを目的に、全国各地の川で活動するNPO法人や市民団体で構成する協議会。「指導者育成」や「子どもの水辺安全講座」などの教育活動の他、「子どもの水辺サポートセンター」との連携による資材や機材の貸出しなどの支援をしています。

川に学ぶ体験活動協議会 (RAC: River Activities Council) は、川での体験活動を支援・推進するあらゆる活動を、時代に合わせて総合的に展開していこうという団体です。

特に、安全に楽しく体験活動を引率する「指導者育成」や「子どもの水辺安全講座」などの教育活動に力を入れています。

川の指導者認定システム

安全で楽しい活動を普及させるためには、川の危険性を正しく理解し伝えられるスキルを身につけた指導者が必要です。

RACの認定システムでは、各講座修了後、定められた期間の活動経験を積むとランクアップのための講座が受講できます。認定ランクに応じて、引率できる人数、活動内容、活動フィールドが広がります。

また、自然体験活動における指導者育成のスタンダード「自然体験活動推進協議会 (CONE)」と連携したカリキュラムを採用しているため、

RACが認定する川の指導者はCONEの制度に対応しており、登録も可能です。

スキルアップ研修会

実際に川で子どもたちへ楽しく安全な体験活動を指導するためには、自らの知識と技術を常に向上しようという意識が非常に大切です。そのために、RACへ登録された指導者がスキルアップができるよう、安全対策を中心とした研修会を各地域で年に数回開催しています。

子どもの水辺安全講座

“セルフレスキュー～安全は自分で確保するもの”の観点から、体験学習を通して危機管理の基礎知識を学ぶ、子どもを対象とした講座です。安全管理は指導者だけが行うものでなく、参加者全員が加わり行うものであるという意識を広め、より安全な活動を実現していくための活動です。

また、水辺での環境学習や体験活動を支援する「子どもの水辺サポートセンター」とも連携、E

ポートやライフジャケット、ヘルメット他の貸出しなどの支援もしています。



川の指導者認定システムにおける指導者の種類と認定の流れ

子どもの水辺安全講座の指導風景



指導者養成講座の水質調査の実習



年1回、全国規模の大会を開催しています。大会では、川に学ぶ体験活動の意義を改めて確認し、全国の川で活動をする人たちが交流を深める場を提供し、実際に川活動に参加し、川に親しみきっかけをつくります。

2006年度の「川に学ぶ体験活動全国大会in関東」では、水辺のリスクマネジメントをテーマに、「水難事故防止するために、今、我々にできること」と題して東京で開催されました。全国各地で水辺体験活動に関わる方や河川管理者が多数参加し、弁護士や大学の教授、現役の市長等も招いてさまざまな検討、交流を深めました。パネルディスカッションでは、水難事故防止策や水辺での体験活動の普及の方策について、誰もがすぐにも取り組める多くの方策がまとめられています。

こうしたさまざまな活動を通し、相互交流による、川で活動する人々のネットワークを広げていくことも大切な活動です。

その他、RACの主催する事業や会員団体への保険の取り扱い、『子ども安全講座教育DVD』やライフジャケット、バック、ファーストエイドキットなどの販売もしています。

また、「川の環境学習に取り組む人のために」というタイトルで、小学校の総合的な学習の時間に携わる人のための手引書を作成し、配布しています。



指導者養成講座のカヤック再乗艇実習



スキルアップ研修会の実習

● RAC : Q & A

Q 誰か指導者を派遣してほしいのですが？

A RACにはRACの認める指導者養成団体へ所属する約1500名の指導者が登録されています。各現場で指導者が必要な場合には、RAC事務局より最寄りの指導者養成団体を紹介しています。

また、RACのホームページに「指導者検索サイト」があり誰でも活用することが可能です。

Q 川の指導者養成講座を開催したいのですが？

A RACの会員となり、開催する指導者養成講座の申請書をRAC事務局へ提出し、講座開催審査を受けます。提出及び講座開催には、RACの認めるトレーナーが必要となりますが、RAC事務局では活動内容を踏まえて最寄りのトレーナーを紹介しています。

RACトレーナーとなるためには、RACの主催するトレーナー研修会の受講要件を満たし、2泊3日の研修会を修了することが必要です。

水について楽しく学び、考えるプログラム

プロジェクトWET

水や水資源に対する認識・知識・理解を深め、責任感を促すことを目標として開発された「水」に関する教育プログラムが「プロジェクトWET」です。教師が一方向的に知識を与えるのではなく、子どもたち自身がアクティビティ(活動)を実践しながら、「水」そのものや、その大切さ、重要性を考え、学んでいくプログラムです。

プロジェクトWETとは、「Water Education for Teachers:教師のための水に関する教育プロジェクト」の略ですが、ここでいう教師とは学校の先生に限りません。

世界各地に広がるプロジェクトWET

プロジェクトWETは、当初、地下水等に関しての共通認識を持つ手段として、1984年に米国ノースダコタ州立水環境委員会によって作られました。現在では、水全般に関する教育プログラムとして全米で広く知られています。

また、世界各地でも関心が持たれ、96年にはInternational Project WETが作られ、カナダ、メキシコ、フィリピン、パラオ、トーゴなどでも取り入れられています。

日本では2003年10月に(財)河川環境管理財団がプロジェクトWETの使用権を取得し、日本での普及・啓発活動を行っています。

プロジェクトWETアクティビティ

プロジェクトWETのプログラムには「水」に関

する91のアクティビティが盛り込まれています。

それは米国内で300人以上の教師・資源管理者・科学者により開発され、600人の教師と34000人の学生たちによってテストされたものです。

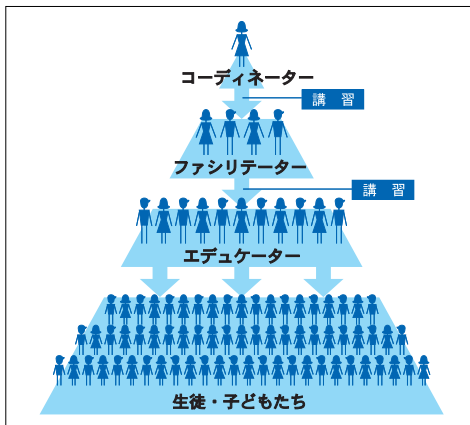
幼稚園児から高校3年生までを対象としており、大小のグループで学習・体を動かすもの・討論・実験を行うものなど、形式も多様です。

アクティビティは『プロジェクトWET カリキュラム アンド アクティビティガイド』にまとめられ、エドゥケーターなどの資格を得た人のみがそれを用いて実施することができます。

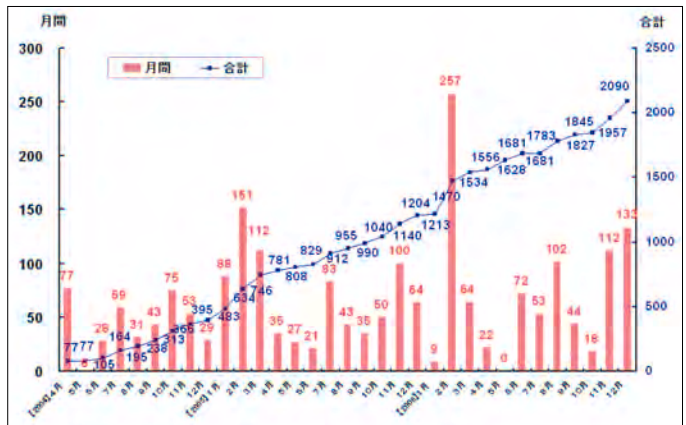
ガイドブックには簡単に使え、しかも楽しい水に関するたくさんのアクティビティが掲載されています。そのカリキュラムは大気、地表、地下水、物理、化学、川の流域、湿地帯、水質、水生生物、水利用、水管理、水の保護と水の未来など、多くの水に関する話題を扱っています。

プログラムの普及と指導方法

それぞれのランクに応じた講習会を修了すると、ファシリテーター、エドゥケーターの資格を得



モデル図(プロジェクトWETの普及と指導)



エドゥケーター登録数の推移(2006年12月末現在)

ることができ、それぞれの役割に従い、プロジェクトWETの普及と指導を行っていきます。

● コーディネーター

プロジェクトWETを総合的に管理・運営・支援し、ファシリテーターを養成する人。

● ファシリテーター

各地域でエドゥケーターを養成し、プロジェクトWETの普及、及びその地域の水に関する環境教育を促進させる人。

● エドゥケーター

プロジェクトWETを用いて、子どもたちに直接、水に関する教育を行う人。

アクティビティの例

■ 「アクアボディー」

対象学年：小学校低学年から小学校高学年
学習目標：水が生命体の主要な構成要素であることを知る。



「アクアボディー」

自分の体の輪郭を描き、人間の体のどこにどのくらいの水が含まれるのかを考えていきます。人間の体を構成する水の量や、生きていくために必要な水の量を感覚的に捉えることで、人間が生きていくなかで水は必要不可欠なものであること、生命は水にいかにか依存しているかを学んでいきます。

■ 「塵もつもれば」

対象学年：小学校高学年から中学生
学習目標：川や湖の水質には誰もが関係あり、責任があることを認識する。汚染を軽減するためにはどうすればよいか分かる。点源汚染と非点源汚染を区別できる。

川岸の土地をいくつかに分けし、それぞれ土地の利用方法を自由に計画してから、その計画が川にどのような影響を及ぼすかを考えていきます。さまざまな水の汚染原因や経路を知り、川を流域として捉えることで、川や水環境を保全する責任はすべての人にあることを学んでいきます。



「塵もつもれば」

■ 「驚異の旅」

対象学年：小学校高学年から中学生
学習目標：水循環の水の移動について言葉で説明する。水循環を移動する水のさまざまな状態を識別する。水がいろいろなところで重要な役割を果たしていることを知る。

子どもたち自身が水の分子となり、サイコロを転がして出た行き先に移動することをくり返すことで、水循環内の水の移動を体験します。水循環を体感しながら、水はさまざまな状態にあること、水の移動経路は単一ではないこと、移動しながら重要な役割を果たしていることなどを学んでいきます。



「驚異の旅」

水辺の活動へ情報提供と支援

子どもの水辺サポートセンター

「子どもの水辺サポートセンター」は、国土交通省・文部科学省・環境省の3省連携（農林水産省も協力）により、「子どもの水辺再発見プロジェクト」の推進・支援組織として財団法人河川環境管理財団内に設立されました。各地域で活動している学校の先生や市民団体に必要な支援策を調査・分析し、さまざまな支援策を実施、展開しています。

1 水辺の活動に関する各種情報の提供

子どもの水辺サポートセンター（以下：当センター）では、ホームページやメールマガジンなどにより、川遊びや水辺の安全対策など、水辺での活動に役立つ下記のような情報を収集・整理し、発信しています。

- 当センターの取り組み・活動に関する情報
- 各種助成制度に関する情報
- 指導者・人材派遣に関する情報
- 国土交通、文部科学、環境、農林水産の4省の施策・制度などに関する情報
- 講習会、シンポジウムなどに関する情報

2 学習資料の配布

全国の小中学生等を対象として河川環境や水質、水辺での遊び方、ワークシートなどを盛り込んだ冊子「水辺から学ぼう」をはじめとして、子どもたちの学習の手引きと

なるさまざまな副読本等の資料の配布を行っています。

配布を希望される場合は、当センターまでご連絡ください（冊子は無料、送料のみ負担）。

- 「水辺から学ぼう」（第1～5号）水辺での学び方を紹介
- 「川の本」（No.1～61）川の自然、川との遊び、川にまつわる逸話などを紹介
- 「川の水」河川の水質について紹介
- 「私たちと水」日本や世界の水事情を紹介する冊子
- 「水辺の安全ハンドブック」水辺での安全確保や危険回避手法を紹介。

3 体験活動の支援

- 資機材の貸し出し（※下記写真参照）

子どもたちの水辺体験活動に必要な、さまざまな資機材を無料で貸し出しています（送料のみ自己負担）。ホームページの『資機材の貸し出し』で受け付けています。



ライフジャケット（子供用）200 着



ライフジャケット（大人用）100 着



ライフジャケット（指導者用）15 着



ヘルメット 70 個



Eボート 4 台



スローロープ 40 本



川の聴診器 10本



流速計 1台



缶バッチ製作機 3台

子どもの水辺サポートセンターにお寄りください

- 平日：10時～17時（土・日・祝日・年末年始は休館）
- 〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町 11-9 住友生命日本橋小伝馬町ビル
財団法人 河川環境管理財団 2 階（地下鉄日比谷線「小伝馬町」駅2番出口より徒歩1分）
- 電話 03-5847-8307
- ファックス 03-5847-8314
- ホームページ <http://www.mizube-support-center.org/top.html>
- E-Mail msc@mizube-support-center.org

● **河川整備基金助成事業**：(財)河川環境管理財団が管理・運営する河川整備基金では、市民団体や小中高等学校等が行う河川環境教育等の「国民的啓発運動」、自治体や市民団

体などが行う「環境整備対策」などに対し助成を行っています。河川整備基金助成事業の詳細につきましては、当財団ホームページをご覧ください。

市民団体の水辺での活動を支援するサイト

- 子どもの水辺再発見プロジェクト
<http://www.mlit.go.jp/river/kankyou/kodomo/right.html>
- 子どもの水辺サポートセンター
<http://www.mizube-support-center.org/top.html>
- 河川整備基金助成事業について【(財)河川環境管理財団HP】
<http://www.kasen.or.jp/>
- プロジェクトWET
<http://www.kasen.or.jp/wet/>
- 国土交通省河川局 Kids Web
<http://www.mlit.go.jp/river/kidsweb/index.html>
- 川に学ぶ体験活動協議会(RAC)
<http://www.rac.gr.jp/>

◎ 宝くじ一口メモ

■ 地方公共団体（都道府県や市町村のことです。）は、学校や保育園とか警察署や消防署を設けたり、道路を造ったり、病院や水道を経営したり、皆さんの毎日の生活に欠かせない仕事をたくさんしています。

■ こういう仕事をしていくには、お金がたくさん必要です。そのため、お父さんやお母さんは税金を納めたり、施設を使うときにお金を支払ったりします。

■ 宝くじは、このような仕事に必要なお金を得るため、全国の都道府県と指定都市が発行しているのです。

■ 宝くじを買ってもらったお金から賞金として支払うお金などを差し引いた残りのお金が地方公共団体の収入になります。

そうして得た地方公共団体の収入は、平成17年度では4398億円になりました。

■ このお金は地方公共団体の予算の一部として、道路をよくしたり、川を安全・きれいにしたり、公園をつくったり、交通安全のための施設をつくったり、お医者さんの少ない地域で働くお医者さんを養成するなどいろいろなことに使われています。

■ もちろん子どもたちのためにも使われています。たとえば、学校や保育園をつくるために使われたり、児童館をつくるために使われたり、病気になった小さな子どもたちのために使われたりというように子どもたちのためのいろいろな仕事にも使われています。

● 資料・写真提供・取材協力

この本は活動事例を紹介させていただいた各市民団体・行政機関のご協力により作成されました。

● 編集協力

株式会社 学習研究社

● 2007年2月28日発行

● 編集・発行

財団法人 河川環境管理財団



財団法人 河川環境管理財団

本部・子どもの水辺サポートセンター

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町 11-9

住友生命日本橋小伝馬町ビル

TEL : 03-5847-8307 FAX : 03-5847-8314

協賛



財団法人 日本宝くじ協会

ゆめ・すくすく・大きくなあれ。

夢みる気持ちを大切に育ててほしい。

子どもも可能性が広がるキッズの未来のよう。

ゆめがこころを育ててほしい。



宝くじの収益金は、身近な街づくりに役立っています。

財団法人 日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。